《初当選、新人議員としての活動》

○紅谷　多才な弁士の応援もあって、選挙区の神奈川第三区では、自民党の現職が全員落選する中、唯一の当選を果たされました。

○河野　そのときは「黒い霧解散」と呼ばれた選挙でしたから、ある意味で新人はかなり有利ですよね。だから初当選者が結構な数で、三、四十人の同期がいたと思います。

○紅谷　公明党が全員初当選だったので、新人議員が百人ほどと多かったのですが、自民党だけでもそれぐらいの数はいました。

○河野　同期はいろんな人がいましたよ。塩川正十郎さんが一番年長で大御所、ソ連大使だった山田久就さん、大村襄治さんは自治省、古屋亨さんは内務省、山下元利さんは大蔵省で鳩山一郎総理の秘書官、青年会議所の武藤嘉文さん、藤波孝生さんと佐藤文生さんは県会議員。塩谷一夫さんは静岡県の部長、ＮＨＫの水野清さん、箕輪登さん、加藤六月さんも同期でした。

○紅谷　私が委員部で新人だった昭和五十年代半ばには、今名前が出た皆さんは現役でいらっしゃいましたが、個性の強い人が多かったという印象です。

○河野　葉梨信行さんもいた。最年少が山口敏夫さん。それから福島で医者をしていた菅波茂さん。僕はとても仲よくしてもらった人で、菅波さんと藤波さんは俳句の宗匠でした。あの頃は、徹夜国会がしょっちゅうありましたが、あの二人は一晩中俳句をつくっているから平気なんですよ。

　菅波さんという人は三木派だったから、ロッキード批判、田中批判という政治姿勢だった。ところが、彼が亡くなった時に田中角栄さんが葬式に来たので何でかと思ったら、後から分かったんだけど、娘婿の田中直紀さんを選挙に出すんだと。田中眞紀子さんから、うちの亭主が出るから応援してよと頼まれたりしましたよ。

それから坂本三十次さん。初登院した日に会館の部屋に入ったら、突然「隣の部屋の坂本だ。よろしく」と言ってやってきたんです。私よりも十五歳も年上で剣道の達人でした。三木派で、同じ党人派として肌が合い、外交・軍縮でも一緒に行動しました。河野謙三参議院議長誕生の際には、党の意向に反して三木派として支援の中心となって動いてくれて、私にとっては忘れることのできない友人でした。私が議長時代の平成十八年に亡くなりました。

自民党以外では、社会党の河上民雄さんは学者でとても誠実な人でした。斉藤正男さんは文教委員としてお付き合いし、加藤万吉さんは同じ選挙区でした。公明党は昭和四十二年の総選挙が第一期生ということもあり、後に委員長になった竹入義勝さん、矢野絢也さん、石田幸四郎さん、政審会長で作詞家でもあった正木良明さんもいました。共産党には弁護士の松本善明さんがいましたね。

○紅谷　新人議員としての国会活動ですが、所属委員会は、一年生は運輸、建設、逓信は人気があって入るのが難しく、国税、地方税関係の大蔵や地行も専門的で難しいのですが、お父様が大臣だった農林や建設ではなく、文教委員会と大蔵委員会に所属されましたが、希望して入られたのでしょうか。

○河野　議員になった時の経緯から、特にどの委員会に入って何をしようというのが、恥ずかしながら余りなかったんですよ。

建設は、ずっとおやじがいたところだから、局長や役人はみんな知っていたので行けば楽だったかもしれないけど、最初から行く気はなかった。

それから農林は、僕は割と農業は好きだったけど、こんな難しい役所はないというふうに頭から思っていたんです。おやじといろいろな話をしていたら、農政は片方が喜ぶと片方はすごく嫌な思いをする。つまり両方がいいとはなかなかいかない。米価を上げれば消費者が困るだろうし、だからといって抑えれば農家は食えなくなる。だからバランスを考える農林の仕事はとても難しい。国内でも国際的にも難しく、あんな難しいものはないと聞かされていたから嫌だと思っていたね。

だから建設とか農林は、選挙区との関係からすればすごくいいけれど、あれこれ考えてだめとなり、空いていたのは文教と外務なんですよ。

文教とか外務というのは、当時は全く票にはならないし、もっと露骨に言えば全く金にならないところなんで、空いているわけです。

高見三郎さんという文部大臣をされた文教族の人と廊下でばったり会い、河野一郎さんのせがれだなと言われ、君はどこの委員会へ行くんだと聞かれ、何も決めていませんと言ったら、それなら文教委員会に入れと言うんです。ああ、そうですかと言ったら、君ね、教育が一番大事だ、何よりも教育を一生懸命勉強するのは大事だから文教委員会へ入れと。僕は高見さんというのはほとんど知らない人なのに懇々と言われて、そういうものかなと思いました。

それで、ちょっと仲間と相談しますと言って帰り、一番親しく文教族だった西岡武夫さんに電話したら、文教へ入って一緒にやりましょうと言われ、藤波孝生さんも仲間なので話したら、文教はいいんじゃないの、僕も入るよと言うので文教になったんです。だから、たいした根拠はなかったんだけど、それが文教族としての始まりでした。

そうしていたら、今度は山中貞則さんと廊下で会い、大蔵委員会に入ったかと言われるので、いや、国対から大蔵は一年生は入れないと言われましたから入っていませんと答えたんです。

○紅谷　山中貞則先生は河野派のメンバーだったのでご存じだったのですね。

○河野　この人は河野派だったけど、一匹オオカミと言われていました。河野派だった多くの人は中曽根さんの下に集まっていたけど、

山中さんは自分は河野一郎さんと直接の関係だったと言い、ずっと中曽根君と呼んでいて、とにかくとても誇り高い人でした。

山中さんから大蔵委員会の件は俺が言っておくと言われ、次の日に大蔵の委員部から委員会ですから来てくださいと電話がかかってきた。僕は入った覚えはないと言ったら、届が出ていると言われたので委員会へ行きましたよ。そうしたら一期生は入れないと聞いていたのに、山下元利さんや古屋亨さんは入っていたんです。彼らは官僚上がりで即戦力なんだね。

ところが、入ったのはいいんだけれども、政府演説や質疑を聞いても何を言っているのかよくわからなくて、隣の山下元利さんに教えてくださいよと言ったら、あの人は親切で丁寧に教えてくれた。

大蔵委員会の理事に毛利松平さんという人がいて、委員会の定足数確保の担当でした。一番前の席から三人足りないとかと言うんだよね。しようがないから、第十委員室の部屋の前で人が来るのを待っていましたよ。

○紅谷　院内三階のエレベーターと階段の間の部屋ですね。当時は委員室は院内にしかなくて、そこが第十委員室でしたが、その後議事堂分館ができて第八委員室になり、今は第五委員室になっています。

○河野　その場所で、エレベーターを降りてくるのと階段を上がってくるのと両方を見ながら、済みません、委員室に入ってくださいと、間違えて社会党の人に頼んで、俺は社会党だぞと怒られた。

○紅谷　あの部屋は大蔵委員会の定宿で、入り口が一つしかないので強行採決には最も向かない部屋だと言われていました。

○河野　そうです、強行採決があると逃げられない部屋だった。そういうのをみんなあそこで習いましたよ。

○紅谷　私が委員部の若手のころもそうでしたが、自民党には定足数担当の理事がいて、定足数には非常に注意を払っていました。

○河野　社会党のうるさ方がいて、しょっちゅう見に来ては一人足りないとか二人足りないとか言うんです。

○紅谷　あのころ、大蔵の社会党理事は堀昌雄さんという長老で、与党からも一目置かれる存在でした。国対からは副委員長が定期的に回ってきて、委員会が止まったことがありました。

○河野　そうでした。僕なんか委員会にいても議論は全然わからず役に立たないから、毛利さんに言われて定足数の確保にだけは協力しましたよ。

○紅谷　新人議員としての戸惑いは随分あったでしょうか。

○河野　まず、うっかりすると議員会館まで帰れなくなることがありました。どっちが東だか西だかわからず、どんどん行って参議院の方へ行ったりしました。おやじの追悼演説で初めて国会に入り、当選して登院したのが二回目だから、他の人はどうしてよく知っているのかと思うぐらい院内のことは知らなかったですね。

最も戸惑ったのは強行採決で、もともと強行採決には反対だったんだけど、文教委員会は強行採決が何度もあったんですよ。

文教委員会所属になって党の文教部会に出席すると、真ん中に座っているのは灘尾弘吉さん、坂田道太さん、高見さんで、灘尾さんは内務官僚だったけど、坂田さんも高見さんもそれぞれ自説があって、坂田さんは、どっちかと言えばリベラルな人でした。

文教部会というのは、とにかく一番大きな仕事は日教組対策なんです。教育の場にいながらストをやるというので日教組対策ばかり。森山欽司さんを筆頭に日教組対策の鬼みたいな人達が、毎回日教組の問題について語るので閉口し、それは僕にとってはとても面白くなかった。そんなことばかりでいいのかなという思いがあったけど、灘尾さんや坂田さん、高見さんの人柄にとても惹かれたんです。

一方では若い議員もいて、そのころ昭和会という昭和生まれの議員の会ができて、谷川和穂さん、海部さんが昭和生まれの一番上で

す。西岡さんが事務局長をしていて、そういう人との付き合いが出てきて、文教委員会や文教部会はとても居心地が良くなったんです。何をやるというわけではないけど必ず出て、最後まで居残って話を聞いていることで、だんだん存在を認められるようになっていきました。

その部会で一番最初に言われたのは、アメリカの空母エンタープライズが佐世保へ入港し、そこで学生と警察官がやり合うからそれを見てこいというので、佐藤文生さんと二人で佐世保へ行きました。

駅へ着いたら、学生はプラットホームから飛びおりて線路の石を投げるので危なくてしようがないから、たまらずビルの屋上から視察しようと上がったら先客がいて、それが田英夫という人でした。彼はまだＴＢＳのキャスターで、佐世保の学生闘争を取材しに来ていて一緒になった。その後、田という人ととても仲よくなったけど、馴れ初めはそこでした。

一方、文教委員会は何度も強行採決をするんです。まず最初に教頭法、学校の教頭職を法制化して、管理職、管理制度をつくろうという内容。それに対して、日教組は管理制度はだめだと反対し、何回もはね返される。それで、文教部会が文部省に対して、どうやって教員を管理するかを考えて、教頭は一般の先生と校長先生の間の中間管理職にする。こちら側につけるという教頭法という法律を作って、管理を強化するということをやった。その管理強化に日教組は当然のことながら反対する。

それから、教育の現場に人材を確保する法律。これも野党は反対なんです。委員長の八木徹雄さんが病気になって、僕に委員長代理をやれと言われ、強行採決をしたんです。僕は強行採決は反対だったけれども、自分でやらなきゃならぬ羽目になって、浜田幸一さんの助けで抱きかかえられて委員長席から降りたことがありました。

○紅谷　今は当選一回で理事になることはありませんし、委員長代理までしているんですね。

○河野　それで、本会議で委員長報告もしろと言われ演壇に立ったら、社会党の角屋堅次郎さんから名指しで思い切りやじられた。付き合ったらいい人だったけど、その時は顔を真っ赤にして議席から怒鳴っていましたよ。

○紅谷　当時の委員長代理の指定文書と、その後八木委員長が亡くなって、河野委員長代理名で理事に香典をお願いした文書が委員部に残っていました。

○河野　ええ、委員部にはそんな資料が残っているの。僕が昭和四十六年四月に委員長代理になって、七月に八木さんは亡くなったんです。僕は八木さんに呼ばれて、こういうことだから君がやってくれと言われ、そうですかと受けた。

それで、強行採決をやったら国対に呼ばれて、よくやったから希望する委員会に入れてやるから、希望する委員会はあるかと言われたけど、返事をしなかったら国対の方が気を利かせて、君の選挙区は河村勝が相手だから、運輸委員になっておくといいと言われたんです。委員会に行かなきゃいけないし、かえって面倒だなと思っていたら、小此木彦三郎さんが運輸委員をやりたいと言っていると聞いて、僕が替わってあげますと言って替わったんだ。

○紅谷　文教委員会をやっていた当時の第三委員室というのは、社会労働委員会と文教委員会が使っていましたが、強行採決が本当に多い部屋でした。

○河野　そうでしたね。しかも日教組出身の議員はみんな体操の先生じゃないかと思うほど、ぽんぽんと飛んで委員長席まで行った。

○築山〔衆議院事務局〕　そういう文教委員会で、やはり大学紛争の関係では、大学運営臨時措置法が一番大きな法案でした。

○紅谷　ちょうど七〇年安保闘争の真っただ中で、羽田闘争や佐世保エンタープライズ入港阻止闘争があった昭和四十三年ぐらいから

が、大学紛争が全国に広まり激しい時期だったかと思います。
　そういう中で、大学運営臨時措置法は昭和四十四年の常会に提出され、文教の理事として、また文教族と言われるようになった中で、この法案に対する思い出をお聞かせいただければと思います。
○河野　それは何といっても大仕事でした。
　大学紛争の事の起こりは慶応の学費値上げですよね。それに追随して早稲田も値上げをし、さらに私学の大手が学費の値上げをすることに対して学生が反対するという形で起こったんだけれど、大学紛争が激しくなって学外で更に過激になり、最初は商店が学生にとても好意的で、警察が来て学生が店の中へ逃げ込むとかくまったりしていたけど、そのうちショーウインドーを割ったりするものだから、店が学生を入れなくなって学生は本当に困った。過激な学生運動は孤立し、最後は講堂に立てこもったりするようになるんです。
　一番の危機は、東大の入学試験ができなくなるというんですね。伝統ある国立大学の一番の中核が、入学試験ができないということになったら大変だ、何とか入学試験をできるようにしろというけれども、一方でタカ派文教族は入学試験なんか止めろ、捕まえた学生は全部退学させろと言う。しかし、捕まえただけで退学はだめだろうと僕らが反対したら、おまえらあんな学生の味方かとか言って怒られた。そんなことがあって、大学運営臨時措置法という法律をつくろうということになるわけです。
　法律を作っても、学校当局が、その法律は文部省が取り締まるんじゃなくて、大学の自主性を尊重するのでないとだめだと言うので、その主体をどこにするかという議論があって、結局、会社更生法みたいに、つまり大学が助けてくれと言ったらその法律が出ていく、助けてくれと言わなければその法律は出ていかないという仕組みにしたんです。
　ところが、大学が理事会や自治会を学生に抑え込まれて、そういうことを言わなくなるんです。でも、結局は大学が助けてくれと言ったら、つまり難破した船に浮き輪を投げるようなもので、この法律はその浮き輪なんだと説明してできたんです。
○紅谷　大学運営臨時措置法は昭和四十四年五月に提出されますけれども、その前年の十一月の第三次佐藤内閣で、穏健派と言われた坂田道太先生が文部大臣に就任しておられます。
○河野　はじめは坂田大臣で大丈夫かという声はあったけど、誠実な対応をされました。ただ法律はなかなか通らない。社会党が徹底的に反対して物理的な抵抗をするんです。委員長の大坪保雄さんは、本会議の間に委員長席を占拠されるといけないから、私はずっと委員長席に座っていますと言って、本会議に出ないで委員長席に座っていたりした。休憩中に社会党が委員長席を占拠したりしたこともあって、とても苦労したんです。なかなか審議ができなくて本会議だけで五日間ぐらいかかった。
　毎晩夜中まで審議して、採決は全部牛歩で一日に四回も五回もやるわけです。採決して参議院に送った時には、会期末まで二日しかないんだよね。
　僕ら衆議院がへとへとになっていると、参議院の人が来て後は参議院に任せろと言い、本当にやるのかと思ったら、参議院は一回も審議をやらないまま通した。
　大学協会は、そんな法律は一切使わないと言って、大学連盟はそういう決議をするんです。ただ、私立大学協会は、作ってもらってありがたいと言うんです。
　大学紛争を収めるために作った法律なのに、その採決の仕方が強引過ぎて、これじゃだめだと言われていたけど、二ヶ月ぐらいたったら俄かに法律の効果が出て、あっという間に大学紛争は収まりました。これが不思議でした。
　ちょうどその頃に衆議院が解散になり、学生運動がそのままだっ

たら僕ら文教族はひどい目に遭うなと言っていたら、選挙の頃にはもう完全に大学紛争は収まっていました。

○紅谷　その年の年末、昭和四十四年の十二月が選挙でした。

○河野　その時はほっとしましたね。

　僕が文教族というのはそういうことで、当選三回の終わりに自民党を離党するのですが、それまでに文部政務次官や文教部会の副部会長もやって、ずっと文教族でした。

《サイパン島訪問》

○紅谷　初当選から二年後の昭和四十四年の常会が終わった後に、河野先生の平和や戦争に対する意識形成に大きな影響を与えたと思われるサイパン島に訪問されます。議員として初めての外遊ですが、これはどういう経緯で行くことになったのでしょうか、党の派遣だったのでしょうか。

○河野　党は全然関係ないです。僕には党からの外遊なんて声はかからないし、文教委員会の海外派遣でもなく、国会が終わったから選挙区回りでもするかと思っていたら、静岡県選出で父の秘書をしていた木部佳昭さんに呼ばれて、海外に出かけるけど一緒に行かないかと言われた。どこへ行くとも言わないんだけど、いいですよ、どこへでも行きますと言ったら、一緒に行こうということになったんです。

　そうしたら、何も言わないでついてこいと言うので行ったら、園田直厚生大臣のところに行ったんです。そこで初めて聞いたのは、遺骨収集の現場を見に行きたいと思う。サイパン、テニアン、コロール、あの辺はまだ遺骨収集がほとんど手がついておらず、このままにしておけないから厚生省もちゃんとやってほしいと言ったら、園田大臣は、君が現地をよく見て報告書を出してくれたら厚生省でもやるからという話でした。

　それでは、河野君と二人で行きますからとなって、行くことになったんです。

○紅谷　サイパンへ行かれたのは、議員としては木部先生と二人で、他に厚生省の援護局の職員などは同行したのですか。

○河野　議員は二人で、他に三人の同行者がいました。一人は木部さんの選挙区の熱海ワニ園のオーナー。それから大倉さんというホテルオークラの一族の人、そしてもう一人は僕の秘書で父の代からの秘書の石川達夫君で、全部で五人で行きました。

　東京から、米軍基地しかないグアム島へ行きました。小さなドライブインみたいなモーテルに泊まって、サイパンやテニアン、ヤップ、コロール島の事情を聞いて、県庁所在地みたいなのがコロールで、行こうというけれど交通機関がないから、飛行機をチャーターして行ったんです。

　最初にサイパンへ行ったんだけど、プルプルと頼りない飛行機で、パイロットが、去年の秋までは四機あったけど墜落して二機になったと言うんだ。飛行場なんて無くて原っぱの滑走路へ降りるんですよ。

　サイパンで遺骨収集の現場を見に行ったけど、それが本当に凄まじく、二度と見たくないというような凄惨な光景でした。

○紅谷　終戦から二十年は経っていますよね。

○河野　そうですね。二十年経ってもほとんどそのままで、弁当箱みたいなものと水を入れる瓶の横に寝たまま機関銃を持っている兵士の遺骨と、とにかく話にならないほど酷かったですよ。

○紅谷　サイパンは、第一次世界大戦後は日本が統治していましたから、日本人がたくさんいたと聞いています。

○河野　多くの日本人がいたから、現地の人も日本語が結構できたんです。日本が統治していた頃は電車が走っていたけど、もう電車

なんか跡形もなく、あの頃はよかったと現地の人は言う。花子さんとか太郎さんとかという名前の人がいて、日本の歌を歌っている人もいましたね。

○紅谷　サイパンには一番多いときで三万人ほどの住民がいたようですが、軍人だけではなく民間人も含め一万人余りが亡くなったと言われていますから、そこらじゅうにまだ遺骨があったのでしょうか。

○河野　そう、あるんですよ。それはすごかったですよ。

日本人が飛び降りて自殺したというバンザイクリフは、立ち入り禁止で行かせてもらえない。不発弾もあるから危ないと言われた。

コロールの島の中へ入っていくのに、車もなきゃ何にもないからどこへ行くのも歩いていく以外にないわけですよ。唯一川をモーターボートでさかのぼって行くけれど、大きな倒木があってストップし、そこからは道なんかないから川っぷちをジャブジャブ歩いていくんです。案内してくれる現地の人は、蛮刀というのか刀で木を切りながら道を作ってくれて、どこが終点かわからずに歩いて山のてっぺんまで行ったら、あの向こうの山に野戦病院があって、そこに何十人かいたけど全員死んだから、遺骨がそのままあると言うけど、そこまで行ったら帰りは夜中になると言うので行けなかったんです。

○紅谷　戦後二十年も経っていたのに、日本人で訪れる人はいなかったのですか。

○河野　ほとんどいなかったんです。時々遺骨収集で遺族の人が来たらしいけど、現地の人が、誰の骨かわからないのを集めて渡し、それを持って帰ったということはあったらしいだけで、それ以外はほとんど来なかったんですよ。

木部さんの選挙区の人から、当番兵だった時に中佐が死んだのでサイパンの山の麓に埋めてきたから、骨でも持って帰ってきてくれと言われた。二十年も経っているし、地図を描いたって道もないからわからないんだけど、こっちを向くと何とかが見えるところに大きな岩があって、その下にありますからと。そうしたら本当にあって、刀を抱いて寝かせてあると言われたけど、刀は錆びて針金みたいになっているんです。下顎を持って帰ろうというので、しゃれこうべの下顎を外してポケットに入れて、そんなことをしてはいけないらしいけど、持って帰ってきました。

それで地元の歯医者さんに見せたら、間違いなくカルテどおりに虫歯の跡があって本人だと言っていました。そういうのがそのまま残っていたんです。

ペリリュー島、今のパラオは、この前上皇陛下が行かれましたが、あそこは日本軍が全滅した場所です。

聞き取りをすると、弾に当たって死んだのもいるけれど、かなりが餓死ですよ。そこら辺でタコつぼみたいなのを掘って、その中で機関銃を構えて、敵が来たら撃つつもりでいたんだけど敵は来ない。そのうち水がなくなり食料がなくなって、餓死してしまったんです。戦争というのは本当に不条理なものだよね。

サイパンだけではないだろうけど南方の戦死者は四万人。しかも南洋庁があったから民間人の死者もかなりいたようだね。帰り損ねて帰れなくなったんだろうね。

○寺坂〔衆議院事務局〕　河野先生の自伝の中で、そこでの光景を見て、もう戦争をさせない、それが政治の役割なんだと思ったと書いていらっしゃいますが、相当な衝撃を受けられたのですね。

○河野　全くそうでしたし、本当にショックでしたね。あの時に、戦争だけはやっちゃいけない、戦争というのは本当にひどいものだ。しかも、作戦とか上官の命令は拒否できないから、そこで機関銃を構えたまま餓死するんだからね。普通なら逃げて帰ってくるよね。本当にすさまじい光景を見せつけられた。

それがサイパン島の訪問でした。

《官僚政治と党人政治》

○紅谷　昭和四十年代に入ってから、河野一郎、大野伴睦という、いわゆる党人派の大黒柱が次々に亡くなって、池田、佐藤という官僚派の総理が続きますが、その後派閥が分裂して、党人派はだんだんなくなり、官僚派の佐藤派も田中角栄さんが継ぎ、党人派と官僚派という境がだんだんなくなっていったように思います。

国会議員になって、派閥には入られていたのでしょうか。

○河野　当選直後は無派閥です。

それは、父が死んだ後、春秋会河野派が中曽根さんと森清・重政誠之さんグループとに分かれ、中曽根さんの方が春秋会から出て新政同志会という派閥を作る。森・重政派はそのまま春秋会に残るものだから、春秋会は河野一郎の次の会長は森清さんになるんですが、大部分は中曽根さんの新政同志会に行くんです。ただ、中曽根さんは中曽根さんで、俺は河野派を継承しているんだと言っていた時もあるんです。

森・重政派と中曽根派はどこが違ったかというと、佐藤栄作さんとの関係をどう見るかということで意見が違ったんです。森・重政は徹底的に反佐藤でいく、それが河野一郎の遺志だという面が強く、一方の中曽根さんは河野派というグループの存続が何より大事だから、手を握るまではいかなくても、時には佐藤栄作を認めてでも自分たちの存在を大きく残すことが大事だという、やや戦略的な面が強かった。

ただ、中曽根という人は、演説をやらせると一流だったから、選挙のためには中曽根の方にいた方が有利だという人が、みんな行ったんです。一方、森・重政というのは、パフォーマンスが余り得意じゃなかった。

ところが、中曽根さんは、すぐに佐藤さんと手を握って佐藤内閣で入閣するんです。それで、森・重政派の人達は、河野一郎の遺志を全然継いでいない、裏切りだと言って怒るわけです。

そうやって両派が対立しているところに僕が当選したものだから、両方とも自分の方へ来いと言ってくるから、どっちにも行けなくて無派閥でいたんです。

僕は無派閥でいて、一年生議員でまだ三十歳になったばかりなのに、無鉄砲にも両派を何とか一緒にしたいと思って、一つになってくださいと両方に言いに行ったんです。

そうすると、中曽根さんの方は、河野派は俺の方だと言い、森・重政の方は、割と僕の言うことをそれなりに聞いてくれて、一つになれればその方がいいと言うんです。

それで、僕は何とかなるかもしれないと思って、中曽根派にいた園田直さんとか櫻内義雄さんに話をして、それで森さんのところへ行って、森さん、中曽根さんを長にすれば向こうは一緒になってくれるから、あなたは長を譲ってくださいと言ったんだ。河野一郎が初代春秋会会長、二代目は森清で、譲っても中曽根は三代目になるんだから、あなたは二代目として上から見てりゃいいんだから、譲ったらどうですかと、若いのが生意気に言いに行きましたよ。そうしたら森さんは、俺は全然こだわらないから、中曽根君がいいなら会長で迎えても構わないと言う。

うまくやったな、これは一つになるなと思って喜んでいたら、その三日後だかに森さんが突然亡くなってしまうんです。もう完全に合同は無理。森・重政派で森が死んだから、あとは中曽根派が吸収するだけなんですよね。もう統一はだめだと断念して、僕は中曽根派へ入るんです。

中曽根派には田川誠一さん、藤波さん、それから木部佳昭さんがいたんです。田川さんは、僕が無派閥でいる時は派閥で聞いた話を僕に伝えてくれて、今度は何があるからとか一々連絡してくれてい

た。僕が中曽根は余り好きじゃないと言ったら、好き嫌いなんか言っていられないよ、入ればいいと。ところが、入ったらすぐ田川さんが中曽根さんと喧嘩して出ていって、僕一人中曽根派に残ったということがありました。

僕は官僚派が嫌いだったけれど、その頃からどれが党人派でどれが官僚派かわからなくなった。さっき話があったように、佐藤派の後継が田中角栄、実際は田中さんにならないけど総理は田中さんになるんです。片方の中曽根さんというのはよくよく見れば官僚だから、自分は官僚派の中曽根派にいて、向こうは田中派だし、何かわけがわからなくなった。ただ、その頃でも三木武夫さんという人は党人派なんです。だから非常に親近感があったけど、なぜかもう一つ行き切れなかったですね。

三木派は、番町政策研究所という事務所を構え、三木武夫さんという人は戦前派の保守系代議士で、この人だけは追放にならないんです。なぜならアメリカの大学への留学歴があるから、進駐軍が追放しなくてもよさそうだと思ったんじゃないかな。保守の戦前派は追放で十年ぐらいブランクがあるから、その間に三木さんは地歩を固めるんです。更に、松村さんと一緒に派を作って、番町研に立て籠るんです。

三木さんの、そういうちょっとバタ臭い保守というのは魅力でした。加えて、僕の仲間はほとんど三木派でした。坂本三十次さん、西岡武夫さん、山口敏夫さん、塩谷一夫さん、みんな三木派。彼らは来い来いと言ってくれたけど、何でかそこまではいかなかった。けれども非常に親近感があったから、僕は中曽根さんの家なんか行ったことはないけど、南平台の三木邸にはよく行っていましたよ。

○紅谷　今お話がありましたけれども、昭和四十三年の総裁選で、中曽根さんは佐藤総理の三選を支持して、それに反対だった田川誠一さんは派閥を出られた。

それでも先生は中曽根派に残られたのですか。

○河野　いたんですよ。それは、あの佐藤再選か三選のときに、中曽根さんは佐藤支持だと言い、僕は中曽根派にいるけれども佐藤批判をして支持しないと言ったのに、それでもいいからいろと言う。だから、中曽根派にいて公然と佐藤批判をし、テレビでも中曽根派の河野さんと言うけれども、ずっと佐藤批判をしていましたよ。それでも中曽根さんは、まあ、一郎のせがれだからということもあってか、目をつぶってくれていたんだな。僕を少し甘やかしたかもわからない。

○紅谷　その頃には、党人派と言われるのは、もう三木派だけだったのですか。

○河野　本当に三木派だけでした。大野伴睦さんも亡くなっていたからね。大野さんのところには中川一郎さんがいて、他は村上勇さんや船田中さん、水田三喜男さんがいたけど、はっきりとした党人派とまではいかないんですよ。一番党人派らしいのは田中角栄さんだった。だから、福田か田中かというときには田中を支持しましたよ。佐藤のときにはいつも三木でしたから、総裁選で投票して勝ったことがないんだ。僕が推す方はいつも負ける。

○紅谷　それが昭和四十年代前半で、四十年代後半に宏池会は大平派に衣替えしましたが、ここは圧倒的に官僚中心の派閥だったと思います。

○河野　ここは本当にすごい官僚集団です。

ただ、この官僚はちょっと違っていて、大平という人は傑出していたよね。池田という人は、亡くなる直前にしか会っていないから余りよく知らないけれど、池田、大平というのは傑出していたんじゃないかな。

○紅谷　今は、官僚派、党人派という分類は全然通用しないと思いますけれども、その流れというのは残っているのでしょうか。

○河野　いや、もうないかもしれないね。最近はむしろ、官僚出身と二代目、それから地方議員と、三つぐらいに分かれているのかな。

　官僚出身というのが恐らく三割五分から四割ぐらいいるんだろう。それから二代目もやはり四割近く、もっといるかもしれない。ただ、二代目で官僚というのもいるだろうし、あとはその他というのが一割ぐらいかな。官僚派が多いけど、必ずしも全盛でいくかどうかはわからないよね。ちょっと最近はできが悪いものね。

　二代目というのが小渕さんとか橋本さんとかという人達だよね。だから、こういう人がある意味じゃ党人派なんだけれども、根っからの党人派じゃない。僕の友達で佐藤文生とか坂本三十次とかというのは根っからの党人派で、この連中はきっぷもよかったし、たたき上げだからすごく現場のことをよく知っていたよね。

○紅谷　そういう派閥の変質のような時期だったので、同期で拓世会を作ったり、アジア・アフリカ問題研究会（ＡＡ研）だとか、そういう政策的な集まりになってきたのは、そういうところからなのでしょうか。

○河野　そうですね、本来、派閥というのはリーダーがいて、そのリーダーの人間性とか政策とかに魅力を感じた者がついていってグループを作ったのが派閥なんだけれども、今は何だか株式会社みたいになって、みんなで総裁選の時のように株を持っているから、社長がいなくなるとその次の専務が社長になるから、リーダーの魅力とかじゃないんですよね。むしろ数が力、武器になってそこに集まっているという印象です。だから非常に魅力的なリーダーというのはいないですよね。

　昔の派閥は一週間に何回か昼飯会なんかやると、リーダーが一人でしゃべって、それを聞いてみんながこういう主張をしようとなっていたけれど、今はリーダーがどっち向いているかなんて関係なく、中堅クラスの政策通がいろいろなことを言っているから派閥はまとまらないで、七、三とかに分かれて、三割ぐらいの反対がいつもあるというような格好ですよね。

　昔は、それはそれで例えば三木派なんかを見ていても、やはりいろいろな人がいて必ずしも全部すっきり三木さんの主張でまとまったわけじゃないけれど、それでも何となく最後は三木さんに一任とかいって会長に全部任せて、こうしようとやったんだけれどもね。

○紅谷　確かに、昭和から平成にかけて、派閥は三角大福中と言われて右から左まであり、中曽根が一番右で、三木派が一番左。それで大体、自民党の派閥の中で政策的にどっちなのか、そういう一つの道しるべみたいなものがあったと思います。

○河野　それで分かったよね。今はもう全然そういうのは何派だかなんてわからないものね。派閥の長というけれども、派閥の中でそんなに傑出しているわけじゃないから、派閥は選挙制度が変わったからなくなったとかじゃなくて、人間的にそういう人物がいなくなったというのが一番大きな要因だと思いますね。

○清家〔衆議院事務局〕　昔でしたら、自民党の中で疑似的な政権交代があって切磋琢磨しましたけど、今は一強じゃないですけれども、余りそうじゃないことを言うと、いろいろ問題が出てきてしまうということがあるのでしょうか。

○河野　合わせなきゃいけないのは大変だよね。多様な議論がなくなったね。

○紅谷　それは、自民党には右から左まで多様な意見があって、法案が出てくるまでに部会や政調で事前に十分議論したから、余り質疑しなくていいんだとよく言われたのですが、今は自民党の中にそういう幅広い議論があるのでしょうか。

○河野　そうだね。本来、幅広い意見があって、それを集約して自民党の意思決定にしていたのが、最近は政策に関する派閥の主義・主張の違いが見えにくくなってしまったように感じますね。

○紅谷　先生が初当選された昭和四十年代の派閥と今とでは隔世の感がありますが、昭和五十一年に新自由クラブを結成されて離党されるまでは、ずっと中曽根派に所属されていたのでしょうか。

○河野　中曽根派からは出たんです。僕は中曽根派にいたからって中曽根派で金をもらった記憶もないものね。

《非核三原則》

○紅谷　非核三原則は、国会で決議されているように、国是として堅持することを意思表示しています。非核三原則が問題になったのは、一番最初はビキニ諸島での第五福竜丸の被爆が発端かと思いますが、国会で非核三原則というと、ちょうど先生が当選された昭和四十二年に佐藤総理が初めて国会で非核三原則が国是だという答弁をされました。

○河野　三原則というけれども、最初は二・半ぐらいだったんだね。持たず、つくらず、三つ目は、むにゃむにゃなんだよ。国会の議論の中に載せたのは佐藤総理で、その後に三木さんがそれを補強するわけです。

　僕はそこが不思議で、僕が自民党を離党する大きな理由に、自民党の政策綱領改正委員会というのがあって、僕は自民党の総理が非核三原則を言い始めて、国連を始めとして世界中に非核三原則を評価する人が多いのに、何で自民党は党議に非核三原則を入れないんだ、自民党の党議に非核三原則を入れればいいじゃないかと言ったら何故か怒られて、袋だたきに遭いましたよ。

　あの頃から、核保有の野心を持っている議員が自民党にはたくさんいるんじゃないかと僕は疑っているんです。今でも、あわよくば核は持とうという非常に強い野心を持っている人がいる。これは原発を絶対手放さないというしつこさの裏返しで、もう核保有は絶対諦めないということですよ。

　だから、今は持てないけれども、永遠に持たないと封をすることは絶対だめだということがあって、非核三原則に対する自民党内タカ派の反対、抵抗というのはすごく強かった。それが強いほど、こっちも絶対やってやると頑張ったから、とうとう最後は追い出されたんだけれどもね。

　この非核三原則と慰安婦の二つの問題は、僕の政治生活の中で、悪い意味じゃなくて、すごく大きなダメージでしたね。この圧力が僕の行く手を相当阻んで、それと闘いながら乗り越えてきたから、非常に思い出が多いですね。

　非核三原則と言わなくても、核軍縮だけでもやりたいということで、政治家としての最後の集大成がＧ８議長会議の広島開催ですけれども、そこへ向かう核問題をずっと言ってきた一番最初が、自民党の党議への非核三原則挿入だったんです。あの頃は世界も核実験は南方に行けばやってもいいみたいな話で実際にやっていたわけだけれども、福竜丸で被害が出て広島と重なるから、日本人にとっては一番機微な問題なんです。

○紅谷　お話があったように、沖縄返還との関係があり、なかなか、持ち込まずについては本当はどうだったのか、密約があったのではないかと後から問題になりましたけれども、そうはいえ、国是ということで守られてきて、本会議でも何度か、国連軍縮総会の関係ですけれども、決議の中で国是と言っています。しかし、今の内閣も同じ表現はしていますが、以前に比べると、非核三原則については余り議論されなくなったように思います。

○河野　だから、圧力が減っているんですよね。これは今の話だけれども、それを一番感じるのは、やはり核兵器禁止条約。あの条約を日本が棄権しちゃうんですよ。これは私が教えている早稲田大学の講義でダブルスタンダードだと話しましたけれども、核廃絶の先

頭に立つと一方では言いながら、一方では核の傘に入っている以上は余り激しくはできないと言っているわけですよね。

これは、広島へ行ってみると、つくづくそう思うものね。それで、ひところは核兵器というのは使えない兵器だ、持つのは持ったらいいが、どうせ使えない兵器だからと誰もがそう思っていたんだけれども、このごろは小型化してピンポイントで使える兵器になっているから、いろいろなところに搭載して核兵器を実用化するということをロシアが一遍やったんだ。

これぐらいは、本当は僕らのころにやらなきゃいけなかったんだけれども、やはり世代が替わると、だんだん圧力が薄れて原爆投下を容認する失言が出てくる。

それは人間というものがいないなら、核というのは一番安上がりで一番やっつけちゃうのに簡単な道具であるかもしれないけれども、そんなわけにはいかないよね。いかないですよ。

○紅谷　非核三原則の議論が国会でどの程度なされているかはわかりませんが、少なくとも非核三原則に関する国会決議は、昭和五十三年が最後です。

○河野　平成ではやっていないのですか。

○紅谷　私は昭和五十六年に外務委員会を担当していましたが、元駐日大使だったライシャワーさんが、アメリカの核兵器搭載船が日本に寄港の際にわざわざ兵器を降ろしたりしない、と発言したという「ライシャワー発言」があって問題になりましたが、それ以降あまり問題になっておらず、政権交代の際に、密約問題で核の持ち込み等について議論になった程度ではないかと思います。

○河野　そうだよな。あの密約問題というのは、外務省の吉野北米局長のイニシャルの入った書類があるというので、民主党政権になって、北岡伸一さんが調査会をつくって調べ、核搭載艦の寄港については広義の密約があったというふうに報告書を出したんですよ。

僕が外務大臣のときにも、そういう密約があったんじゃないかという質問があるというので、吉野さんに電話して、そういう意味じゃないよねと言ったら、ええ、そういう意味じゃありませんと言うから、それでもういいと思って国会で答弁したんだけど、彼が署名した書類なんかあるんだよね。いまだに僕は真偽がよくわからないんです。まだきちんと決着がついていなくて闇の中みたいで、よくわからない。

○紅谷　令和になってからの非核三原則は、アメリカはトランプ大統領になり、ロシアと中国を意識し核攻撃発言が出たり、日本でも三原則はわかりつつもということで、防衛大臣経験者からその見直し発言が出てきていますけれども、そういう現状を率直にどう思っていらっしゃいますか。

○河野　僕は、本当に核という兵器だけは、我々の時代に、核兵器禁止条約のときに決着をつけたかったね。

手がかりが全然なかったわけじゃなくて、例えばトラテロルコ条約とか、国際条約の中には核を持ち込ませないという何カ国かの条約があったり、それから、ニュージーランド、オーストラリアの方にもあるから、核を持ち込ませないというグループというのがだんだんできて、それが地球上を全部カバーするようになれば、核を保有する意味がなくなって、核をなくし、核を全廃させるためのアプローチをするいろいろな道があって、その道をみんなで本当に一生懸命探さなきゃだめだと思うんですよね。

僕は、日本が出した国連決議なんかも、あれは僕が外務大臣のときに最初に出した決議ですけれども、それをもう四半世紀経ってもいまだに同じようなことを毎年やっているんです。今年も通りましたと外務省が報告に来るから、何年経っても同じことをやっていても何の効果もないならもうやめて、他のやり方にしたらどうだと、僕は提案者だけれども言うんですよ。

とにかく、みんなで一生懸命核廃絶のための道を探す、それから、それに向かって一歩ずつ前進する努力というのはどうしたって必要なんじゃないかと思うけど、それをやり切れなかったことはとても僕は残念だね。

議員として最後だと思って、Ｇ８下院議長会議を広島でやったけれども、あれだって、あのときの米国議長のペロシ発言がそのままオバマのプラハ演説に繋がって、そこで明らかに核については今までのアメリカの姿勢と全く違う姿勢を出したけれども、日本と同じように、アメリカの本音も核でとにかく威張っていようと思っているんだから、だめだね。

だから、プラハのオバマ演説の直後に、この演説を維持しようと思ったら、国際世論がみんなでこれが大事だということを支えないとアメリカ国内では抑え込まれるから、国際世論でこれを支えなきゃだめだ、そのためには日本が一番最初に国会決議でオバマ演説を評価する、これを支持するということをやるべきだと言って、あのときは議長だったから、いけないかもしれないけれど、誰かを呼んで国会決議をやったらどうだと言ったりしたんだけれども、たまたま運が悪く、あの直後に北朝鮮がミサイル実験をやるんだよね。

それで自民党は、オバマ演説の支持は本音では嫌なわけで、北がミサイル実験なんかやるものだから、そっちへ関心が移って、けしからぬという決議になってしまう。その決議の中で、オバマ演説を一言でもいいから書いてみてくれと言ったけれども実現せず、それでもう国会のオバマ演説についての支持決議が終わっちゃうんだよね。

だから、あのオバマ演説についても、日本の姿勢は余り明らかになっていない。あれは広島から出たというふうに僕も思っているものだから、ちょっと残念だよね。

○紅谷　お話があったように、議長としてＧ８議長会議を広島で行った意義というのは、ペロシ下院議長という、今まで広島を訪れた米国の要人の最高位の人に来てもらっただけでなく、オバマ大統領の広島訪問に繋がった橋渡しの役割を果たされたのだと思います。

そこは広島Ｇ８下院議長会議のところでお話しいただきたいと思います。

《日中国交正常化とＡＡ研》

○紅谷　河野先生の当選二回から当選三回の昭和四十四年から昭和五十一年の間には、自民党を離党し新自由クラブ結成という大きな決断がありますが、その間の大きな政治的な出来事としては、日中国交正常化が挙げられると思います。

河野先生は、議員になる前から民間の交流団体の一員として、国交がない時代に大変な思いをされて中国に行かれたと聞いていますが、議員になってからも中国との関係では中心的な役割を果たしてこられました。議長時代には日中議会交流をスタートされました。

議員引退後の今も、日本国際貿易促進協会の会長として中国の要人と交流されています。このように先生は中国との関係を一貫して重視されてこられましたが、そもそも中国との関わりはいつから、どういう経緯からだったのでしょうか。

○河野　中国とはいろいろな関係があったんです。議員になる前に飼料の輸入会社をやっていて、その頃は鳥の餌のトウモロコシの輸入が多かったんです。トウモロコシはシカゴの相場でアメリカから買うことが多かったのですが、それでは大商社の下請ばかりで面白くなくて、それまでは余りなかったことですけれども、日本からトウモロコシの種をタイへ持っていって蒔いてもらって、できたものを買うという仕事。それと同時に、中国が輸出するならそれを買いに行くという仕事で、これは共産国貿易だから大手の商社はやらな

いわけです。中国の方も、アメリカと取引のある商社には売らないので中小貿易会社の出番で、そこで働いていたことがあったんです。

議員になってからは、河野謙三、田川誠一という私の叔父やいとこが中国に関心を持っていたので、その影響を受けたと思いますね。父の河野一郎も、田川さんの影響で中国の要人と内緒で会ったりしていたんです。そういうのを横で見たり聞いたりしながら、中国には強い関心を持っていました。

そんな中で、鈴木九平さんという私の仲人が、中国貿易をやるなら中国へ行ってみたらどうだと言ってくれたんです。その頃は、中国へ行こうと思ったら中国側からの招待状がないと行けないんです。貿易をやっていましたから、広州貿易会という大きな貿易の交流会に出席するということで、招待状をもらって行くんです。

しかし、行くといっても大変で、香港へ行くのにもアメリカ資本の飛行機には乗らない方がいいと言われ、ヨーロッパ系の飛行機で香港へ行って、泊まるホテルもアメリカ人が泊まるホテルはだめだとか言われて、物すごく神経を使った。ホテルに泊まると夜中に中国の出先の人が部屋に来て、行きたいならパスポートを貸せと言われパスポートを持っていってしまうんですよ。次の日に手続はしてくれてもパスポートは返してくれず、汽車の切符をくれて香港から中国行きの汽車に乗るんです。

香港から羅湖というところへ行くのですが、羅湖の駅では中国の人民解放軍が鉄砲を持ってずらっと並んでいるところへ降りていく。そこから小さな橋を渡ると反対側が中国で、ものすごく開けた湿地の町深圳がある。深圳の駅へ行くと、待合室には真っ赤な表紙の毛語録が山のように積んであって、世界各国の翻訳本の中から日本語のものを見つけて、それを見ながら広州まで行く。

広州の駅に着くと、また中国側の旅行社みたいな人が待っていて最寄りのホテルへ行く。エレベーターはなく、暑いさなかで蚊はブンブン飛んでくる本当にひどいホテルでした。翌日は、広州貿易会という見本市へ行きましたが、内心は北京へ行きたくて来ているところへ、北京から来いと連絡があって、明日の飛行機に乗れというわけですよ。

広州からはノンストップの便もあるのに、その日は各駅停車みたいな飛行機に乗った。飛行機の中では、男のパーサーが毛語録を一緒に読もうなどと言ったりし、いくつかの空港に寄ったあと北京に着いた。

北京では、ちゃんとした人が中国は何を目指しているかという講義をし、夕方になると晩御飯をごちそうしてくれて、夜は京劇やミュージカルみたいなものを見せてくれた。そういう日程が三日か四日あって、段々に中国に対する認識を新たにして帰ってきたんです。それが中国との取っかかりです。

○紅谷　そうすると、最初に中国に行かれたのは、結婚されてから国会議員になるまでの昭和四十年から四十二年までの間でしょうか。

○河野　昭和四十年か四十一年でした。

そういう経験をして選挙に出て当選して、最初に私を丁寧に指導してくれたのは宇都宮徳馬さんです。宇都宮さんの選挙区は東京二区で大田区、品川区なんだけれども、住まいは私の選挙区の神奈川県の大和市という所で、大きな屋敷を構えておられました。

当選して最初に国会に行ったときに肩をたたかれて、僕は君の選挙区に住んでいるんだよ、君に一票入れたからねと言われ、それからいろいろなことを話そうじゃないかとなったんです。

○紅谷　先生とは初対面でしたが、河野一郎先生と宇都宮先生との関係はあったのですか。

○河野　あったんです。そんなに親しくはなかったけど、おやじが経済企画庁長官だったときに政務次官をやっていたようで、君のおやじさんとは政務次官で付き合ったことがあるよと言っておられま

した。宇都宮さんというのは、世に言う政界の一匹オオカミで、最後は三木派にいたけど、いたから何しているというんじゃなくて、本当に自由でしたね。派閥とか人事、政局とかについては全く関心がないようでした。ただ、外交、防衛、経済には関心があって、思想的には石橋湛山さんの流れを汲んでいたかもしれないね。

宇都宮さんからは、中国との関係がいかに重要かという話を聞かされました。この人は本当に日中関係を熱心にやると同時に、日本とアルジェリアの関係もやっていたんです。後の話になりますが、ＡＡ研、アジア・アフリカ研究会は、宇都宮さんの狙うところはアジアは中国で、アフリカはアルジェリアなんです。周恩来や金日成とも親しくて、金日成と会って話をしたときのことを随分聞かされました。

僕が車で東京へ行く時は大和を通るんです。その時に宇都宮さんがちょっと寄っていけと言われて、そこからは宇都宮さんの車に乗せてもらって、自動車の中でずっと今の外交はという話を聞きながら東京に行くんです。それから、晩飯を食おうとか言われて必ず神楽坂へ連れていかれ、延々と日中関係はこれではだめだという話、なぜ北京で台湾ではないのかという話を懇々とされましたね。それが僕の日中関係に議員として関わった最初です。

その頃、日中関係の議員というのはたくさんいましたが、一匹オオカミで全然連携しないんですよ。宇都宮さんは宇都宮中国をやるし、松村先生は松村中国。強いて言えば、松村さんのところに割と真面目な人で、古井喜実さんとか田川誠一さんが集まっていた。

僕は宇都宮中国なんだけれども、宇都宮さんに指導を受けているうちに、叔父の河野謙三から、やはり中国をやるなら松村さんが本流だから、松村さんの話を聞いた方がいいぞと言われて、途中から松村さんの話を聞くようになったけど、僕はずっと宇都宮さんでしたね。だから、宇都宮さんは新自由クラブには入らなかったけれども、新自由クラブの応援団で、ずっと周辺にはいてくれました。

それから、中国関係では鯨岡兵輔さん。あの人は三木派というより本来松村派で、松村さんを私淑していた。松村さんは農業問題が本筋だった人で、文部大臣もやりましたが、晩年は中国一本やりでしたね。

おやじが死んでから、河野謙三が私の親代わりみたいに指導してくれましたが、その謙三が中国に割と熱心で、しかもそれは松村中国ですから、松村さんと話し合って中国がどうだとかと、田川誠一さんも入ってやっていたんですね。田川さんという人は、朝日新聞の記者から松村さんの秘書になるんです。松村さんは田川さんが河野一郎の甥っ子だということは知らなかった。田川さんがいよいよ選挙に出るというときに、松村派か河野派かで二人でやりとりがあって、結局、河野派から出るんだけれども、その当時は河野派には野田武夫さんという人が同じ選挙区にいて、この人は今の野田毅さんの岳父です。野田さんは、熊本が自分の出身地だから熊本から出るからと言って九州に行ってしまい、それで田川さんが出ることになったんです。

野田さんも自民党の中では日中議連の棟梁だった人で、日中関係は理解者というか、中国関係を政治的に一生懸命やっていた人で、そういう人達が私の周りにいました。

○紅谷　しかし、自民党としては、そんなに多いわけではありませんよね。

○河野　多くない、ごく一部です。後に出てくる福田外務大臣不信任案の時に、賛同者は結局十二人になってしまうわけですから多くはなかったです。ただ、田中角栄、大平正芳コンビが日中国交正常化をやったものだから、あれでがらっと変わるんですが、それまでは本当に日陰者ですよ。ほとんどが台湾派ですからね。

○紅谷　その前の佐藤総理、福田外務大臣のころの日中問題に関す

る国会でのやりとり、自民党の中の争いというのはどうだったのでしょうか。

○河野　それは、自民党の外交調査会でしょっちゅうやっていました。いろいろな人が中国へ行っては共同声明を出したりいろいろなことをするものだから、帰ってくると、外交部会や外交調査会では懲罰だと騒いでいた。

　そのころの日本には日台条約があるから、北京に行ってそんなことを言うのはおかしいと言うけれど、北京は殊更一つの中国で代表するのは北京政府だと言うわけで、行ったら必ずそれを認めろと言うし、行く人もそうだと言うものだから、帰ってくると大騒ぎになる。

○紅谷　親中派の一人が藤山愛一郎さんだったのですね。

○河野　そうです。共同声明に署名して帰ってきて、党は懲罰だと言い大騒ぎになったんです。藤山さんは外務大臣経験者だし総裁候補だから、自民党としても放っておけない。しかも、松村謙三さんが、晩年これが最後の訪中だというときに藤山さんを連れていって、私が死んだ後はこの人がやるからと周恩来に紹介して、周恩来も藤山さん頼みますよということをやった後だから、自民党の中でも大きな問題になったんです。

○紅谷　藤山先生が中国に行かれたときは、三百人余りの議員がいたそうですが、自民党議員は少なかったようですが。

○河野　社会党が多くて、自民党はまだまだ少数でした。

　吉田内閣と自民党は断じて中国を認めず、国会答弁は全部中共、中国共産党で、中華人民共和国とは言わないんです。けれども、いよいよ最後は田中訪中になるんです。

　その前の佐藤内閣の末期、佐藤総理、福田外務大臣のときに、中国の国連復帰、国連加盟という問題があるのですが、日本は中国の復帰は認めないと頑張っていたけど、それはだんだん少数になって、最後はアメリカと日本と何か国かになって、あとは中国の復帰、国連加盟を認めるというんです。

　日本は最後に中国を認めるけれど、国連の決議は中国の国連復帰を認めて台湾政府を除名するという決議です。日本は日台条約があるから、中国の加盟は認めるけど台湾の除名は認めないという立場で、アメリカは、この問題は重要事項だから決議は三分の二でないとだめだというルールを逆手にとって、日本とアメリカが自分たちの仲間を引き込もうとするけど、どんどん中国派が増えていって、最後は大部分が賛成して惨敗するわけです。

　福田外務大臣は、最後まで中国は認めないと言い続けて負け、佐藤内閣は斜陽になってきて、国際的にも中国を認めないわけにいかないなという流れの中で内閣は潰れて、本命の福田でなく田中内閣になって国交正常化を行うんですよ。

○紅谷　そこでの日本政府の立場というのは、朝鮮戦争があったので、アメリカ、国連軍と中国が戦っていた状況下という影響があったのでしょうか。

○河野　全くそうです。アメリカはまだ戦っていたわけで、絶対中国を認めないんです。

　だけれども、北京政府は中国領土の大部分を掌握し、自分たちが中国国民を代表していると言うものだから、最後は東欧のアルバニアが代表して決議を出して、それが燎原の火のように燃えて、全部中国支持になっていくんです。それなのに日本はアメリカの先棒を担いで絶対反対だと言うものだから、僕らは、そんなことじゃだめだ、もう勝負はあったじゃないかと言ったけれども、反対だと言って、結局負けて帰ってきた。

　そこで、福田外務大臣には外交能力がない、これから日中は国交正常化しなきゃいけないのに、福田の手じゃ正常化なんかできないから福田は辞めろと言うけれども、辞めないと言う。それじゃ不信

任だといって社会党が不信任案を出して、その不信任案に自民党から十二人が賛成すると言ったので、社会党が出した不信任案に、欠席ならまだしも賛成とは何だとさんざん言われました。

最初は二十人ぐらいいたけど、だんだん減って最後は十二人になるんですね。十二人が、当時は国会のすぐ裏にあった今のキャピトル東急、昔のヒルトンホテルに部屋を借りて立て籠って、絶対賛成するんだと言うけど、僕らは二期生でプレッシャーがかかって大変でした。

一番年長は藤山先生で八十歳近く、そんな長老から山口敏夫だの僕だの若いのが一緒になって、十二人で不信任案に賛成するといって頑張ったけど、執行部からせめて欠席してくれと言われ、最後はだめだと言いつつ欠席するんです。

福田外相不信任案の採決前に、本会議場前のトイレに入っていたら隣に福田さんが来て、君もようやるなと言われ、ちょっと困った記憶がありますね。

後からすごく怒られ、総務会では懲罰だと言われたけど、藤山先生とか偉い人がいたから、結局大したお咎めはなかったね。

○紅谷　欠席の十二人は三木派が多かったようですね。

○河野　そう、藤山、宇都宮、古井、川崎、田川、鯨岡、西岡、菅波。ＡＡ研の一番の中核メンバーだけになって、最後に残ったのが十二人でしたね。

その頃、宇都宮さんも松村さんも、会うたびに中国の話をしてくれたけれども、僕らはそれ以上に二人の人柄に、人格的にすごく尊敬できる人だというので、政治家として尊敬していましたね。

○二見〔衆議院事務局〕　佐藤内閣は米国と歩調を合わせて台湾政府を支持していましたし、自民党内も北京政府を支持しないというのが圧倒的だった中で、河野先生がここまで少数派として取り組んでこられたのは、どのような背景やお考えがあったのでしょうか。

○河野　僕が日中と言ったのは、きっと佐藤さんが台湾だと言ったせいもあるね。もちろん宇都宮さんや松村さんが言われたことが正しい理論だと思っていましたが、ここまで一生懸命やったのは、多少は反佐藤の流れの中で、勢い余ってやっていたというところはあったかもしれない。

○紅谷　藤山さんはテレビでしか存じ上げませんし、宇都宮さんは辛うじて国会の中で拝見した程度ですけれども、どのような方だったのでしょうか。

○河野　藤山さんは、日本商工会議所の会頭から政治の世界に入ったんです。バッジもつけないで岸内閣で外務大臣をやられて、その後、選挙に出て政治家になるのですが、そのときに財界人は挙げて反対で、あなたは財界の藤山なんだから、ああいう汚いところへ入るのはやめなさいと言って皆が止めるけれど、藤山さんは、ここまでやりかかったから自分はやると言って選挙に出るわけです。そこで皆が、絹のハンカチと呼ばれていた藤山さんのことを、絹のハンカチを雑巾にしたと言うんですよ。だけれども、藤山さんはそこは割合と頑固で、そういうことは聞かないで政治家になられた。だから、そこらの政治家とは、挙措動作が全然違っていたね。

大日本製糖を始め大きな会社を幾つも持った藤山コンツェルンと言われた財界人で、赤坂にホテルニュージャパンを造って、そこの二階に自分の事務所を持っておられて、僕らはよく行きました。自宅は今の白金の都ホテルの場所にあって、僕が自民党を離党する前の晩もあそこにいました。政治家とは話題も違うし、たたずまいが全然違う人でしたね。

宇都宮という人は、ミノファーゲン製薬の社長をやっていて、強力ミノファーゲンシーといったか、僕が肝臓で倒れて病院にいるとき、ずっとその強ミノの点滴を受けていた。宇都宮さんは強ミノは何にでも効くと言っていましたよ。

晩年は、屋敷を売ったお金で軍縮資料という雑誌を出し続けるんです。これは立派な雑誌で、ちゃんと朝日新聞に広告を出して、軍縮問題を語る学者が自分の意見を発表する場所がないから、この雑誌を出版して書きたい人は誰でも書けという人でした。党や派閥から金をもらうというのは全然ないから、本当に自由にやっていましたね。

○紅谷　話が戻って恐縮なのですが、国連でのアルバニア決議案は可決しましたけれども、日本はアメリカと歩調を合わせて台湾支持ということで反対しました。一方で、アメリカはその後にキッシンジャーが隠密訪中してどんどん話を進めていましたけれども、アメリカ国内ですら内密にしていましたので、当然、日本は全く知らないで日本だけが取り残された。

それが表に出たときの日本政府や国会はどんな状況だったのでしょうか。

○河野　アメリカはニクソン大統領で、タカ派で中国とは全然だめだったんです。むしろ台湾に一生懸命武器を売ったりして台湾を応援していたから、まさかそのニクソン政権が頭越しで、日本に一言も話をせずに、北京と外交関係を正常化するとは思いませんでした。

キッシンジャーという人が隠密外交で全部話をつけて、米中関係が前進するよという新聞発表をした日が参議院の議長選挙の時だったんですよ。その頃は、中国問題で佐藤さん、福田さんはみそをつけ、それで総裁選挙に入るという時期ですね。

○紅谷　キッシンジャーが訪中したのが昭和四十六年の七月で、ちょうど参議院選挙の時でした。

○河野　その参議院選挙が終わった直後に謙三が河野書簡という手紙を参議院議員に出して、重宗さんがもう一回やると言っていたのを、重宗反対という火の手を上げて猛烈に激しい議長選挙になるんですね。途中で自民党の執行部は、重宗をおろすから河野もおりろと言うんだけれども、河野はおりないと言うので、最後は本当にガチンコ勝負になる。その議長選挙の押し詰まったぎりぎりのところでキッシンジャー訪中が発表されたんです。だから、そこで佐藤内閣は本当に踏んだり蹴ったりになっちゃうわけです。

キッシンジャー訪中で佐藤総理はメンツを失い、その直後の参議院議長選挙では河野謙三に負ける。そこで佐藤は引いて福田へという既定路線が崩れて、福田、田中の一騎打ち、角福戦争になるわけですけれども、福田絶対有利だったのが田中にひっくり返されて、佐藤さんは完全にだめになるんです。最後にむちゃくちゃな記者会見をやって佐藤時代は終わっちゃう、そういう時代です。だから、そのころは、めちゃくちゃだけれども、物すごく活気もあるし、毎日大騒ぎだったという時代でしたね。

○紅谷　中国との国交正常化と福田外相不信任案の中で、ＡＡ研の話がありました。後に先生も会長に就任されますが、どういう政策集団なのでしょうか。

○河野　ＡＡ研はやはり宇都宮徳馬さんなんですよ。

インドネシアのバンドンに非同盟諸国の首脳、東西対立の中で東でも西でもない非同盟の国が集まって、第三の主張、極をつくって平和な世界を作ろうとするわけです。

吉田内閣は、東西対立で完全に西側アメリカ側にいたけれども、鳩山内閣は吉田さんと少し距離を置いて、日ソ交渉を熱心にやるとか言って冷戦の関係、対立からはちょっと引いていたものだから、そのバンドン会議に着目して閣僚を送るんです。

会議には各国の首脳、中国は周恩来、インドネシアのスカルノ、インドのネールが出席し、その会議を評価したということがＡＡ研の一つのベースで、東西じゃなくてアジア、アフリカに着目した研究会をつくろうと結成したんです。

ＡＡ研は、割と党内野党的な人の集まりのように思われていたけ

ど、中国の国連復帰の時、いち早くそれを認めたのは木村俊夫経企庁長官で、公職にある人が中国に言及し、この人がＡＡ研だったものだから、ＡＡ研もクローズアップされました。それまでは反党分子の集まりみたいなことを言われていたけど、そうでもないという評価ですね。

ＡＡ研では、宇都宮徳馬さん、木村俊夫さん、伊東正義さんといった人が中心にいて、とても教育的で一つ一つ丁寧に教えてもらいました。僕らは中国問題なんて最初は全然わかっていなくて、何で中国がそんな難しいのかとか、極端なことを言うと台湾と北京の違いでさえ最初はよくわかっちゃいないんです。多少歴史的なことは本なんか読むからわかるけど、なぜＡＡ研は北京を支持するかという話なんかは、繰り返し宇都宮さんが言い、木村俊夫さんが言い、それから伊東さんが言いでした。

中国が国連に復帰して日中が国交正常化されたので、ＡＡ研の仕事がやや終わったというか、一つの目的を達成したような感じだったんだけど、国交正常化は内閣が決めて国会では議論がないものだから、タカ派は正常化はけしからんと言って、国会の承認が必要な航空協定に反対した。そこで青嵐会と毎日すさまじい議論をしました。

○紅谷　所管の外務委員会では、青嵐会の委員が日中航空協定に反対していました。

○河野　物すごい反対だった。藤尾正行さん、中川一郎さん、それから石原慎太郎さん。自民党の中でも本当にひどかったんですよ。外交部会で、核拡散防止条約の前段で核の使用を制限しようという議論をしようとすると、こっぱみじんになるほど激しく叩かれた。源田実さんという日本海軍航空隊の最高のパイロットだった人が、参議院議員でいて議論に参加されると、こっちは大変でした。

毎日の議論の前に、伊東正義さんが集まれと言って僕らが行くと、こういう議論があるから、こういう反論をしようじゃないかと相談するんだけど、伊東さんが集めると宏池会の人ばかり来るんです。けれども、会議に行くと宏池会は品がよくて何にもしゃべらないので、鯨岡さんと僕が二人で一生懸命しゃべりました。

○紅谷　ＡＡ研は、日中関係が正常化して役目を終えたんじゃないかというお話でしたけれども、軍縮議連のメンバーというのもＡＡ研の流れがあったのですか。

○河野　流れはそうです。この軍縮議連も創設者は宇都宮徳馬さんです。

宇都宮さんが、自民党の政治家のスキャンダルで、俺はあんな連中と一緒に席を同じくしているのは恥ずかしい、嫌いだといって議員を辞め、もう議員なんかやらないと言う。それを、何とかもう一度やってくださいと僕らが頼みに行き、結局、衆議院はやらないけれども参議院ならばやるというので、参議院選挙に出るんですよ。当選するかどうか心配だったけれども当選した。

その選挙中に、選挙公約だと言って、当選したら軍縮議連をつくって軍縮活動をやると掲げた。その頃の世界の流れは軍拡一辺倒で、世界が軍拡に流れている時こそ軍縮をやらなきゃだめだと言う。いつでもこの人は反対派なんですよ。

忘れもしない、選挙の最後の演説を新宿の駅前でやって、僕と田英夫と二人が両側にいた。つまり、実際は無所属なんだけれども、新自由クラブと社民連が推薦して、こっちは押しかけ女房みたいなもので横にいたら、河野君と田君を事務局にして軍縮議連を作ると言っている。当選したら、約束だからと言われて軍縮議連を作ったら物すごく大勢三百人以上が入ったんです。

最初は共産党を入れるかどうかと言っていたけど、宇都宮さんは全部入れろと言って全部入れた。そうして作ったのに、いよいよ発会式の前日に私は会長をやらないと言い出したんです。俺がやると

会自体が色がつき過ぎるから俺はやらない。大石武一さんがいいと言って、大石さんが初代会長になった。当時、大石さんは環境庁長官で尾瀬沼の保存とかで国民的人気があったんです。大石初代会長、二代目三木武夫、その後、総理経験者の鈴木善幸さんや村山富市さんなどが務め、僕が議長就任後も会長をやっていたけれども、その後政権交代等があって消滅したような形になってしまった。

だから、そうやって宇都宮さんがやり僕がやるから、みんな同じ仲間になっちゃうんだ。日中も、ＡＡ研も、軍縮もそうだ。でも、みんな少数派でしたよ。

《河野謙三参議院議長と参議院改革》

○紅谷　昭和四十六年七月に参議院選挙がありました。当時の参議院は独自性がなく衆議院のカーボンコピー、果ては参議院無用論まで言われていました。

参議院議長選挙があり、河野謙三先生は、自民党候補がいる中で河野書簡を出されて議長選挙に出られ、当選されます。

河野謙三議長の人となりについて、お聞かせください。

○河野　当時は佐藤内閣で、長期安定政権だった。それを支えていたのは自民党の参議院で、そこには重宗雄三さんというリーダーがおられ、そのリーダーシップのもとに自民党参議院は一枚岩と言われていたんです。

なぜそうなったかというと、佐藤さんも重宗さんも郷里が山口県で非常に仲がいい。だから佐藤内閣が内閣改造をする時には、必ず参議院枠は重宗さんに任せ、重宗さんが推薦すると必ずなるから、参議院議員で重宗さんの覚えがよくないと大臣になれないという構図で、重宗さんは参議院を完全に掌握していたんです。一方で、参議院の中では重宗天下というのはおかしい、もっと参議院も自由であるべきだという空気がずっとあったんですね。

河野謙三は、最初は緑風会なんです。緑風会というのは一番理想的な参議院像だと、僕は今でも思っています。衆議院は政党政治で自民党と社会党のやり取りで法案が参議院に来る。参議院に来たら、政党に所属していない緑風会という自由な立場で、是は是、非は非として、自由に判断できる存在であるべきだというのが緑風会の本来の趣旨でした。しかし、緑風会の議員といえども、選挙になると自民党か社会党に推薦してもらわないと選挙にならないわけで、そうすると、だんだん自民党も社会党も俺たちの推薦が欲しけりゃ自民党に入れとか社会党に入れとかと言って、どんどん崩れて緑風会はなくなってしまうんです。

それで、河野謙三さんも自民党に入る以外にないのでやむなく自民党に入る。委員長や副議長はやるけれども大臣は絶対やらない。何回も打診があって断り続けるものだから説得力がありました。謙三は大臣をやりたければ衆議院に行けばいいんだ、参議院はチェックすべきで大臣なんか望んじゃだめだと言うものだから、結構煙たい存在でもあったんです。

ところが、そういう存在ではあったけれども、さっきの話のように、佐藤の言うとおり重宗がやるものだから、これでは衆議院のカーボンコピーじゃないか、これなら要らないじゃないかという参議院無用論が出てきて、参議院選挙でも投票率も上がらないとかいろいろ批判をされながら選挙をやるわけです。

選挙が終わって新しい参議院議員が決まった直後に、河野謙三は参議院のあるべき姿を記した河野書簡を全議員に出しました。それは割と軽い気持ちで出したと思うんだけど、意外に共感を呼んで、本人も引っ込みがつかないようなところがあったと思います。

元は重宗じゃだめだという話で、途中で重宗が引っ込むということになって、これで重宗体制を崩そうじゃないか、野党も支持する

ぞと言うけど、これぞという人がいなくて、結局、おまえが手紙を出すからこうなったんだからおまえが出ろというので、責任をとらされるような格好で謙三は手を挙げることになるわけです。

○紅谷　最初の頃は、自民党の長老格が河野謙三さんを議長と言っていたようですね。

○河野　桜会という集まりがあって、そこに長老が集まっていたんです。そこに謙三も入っていたものだから、河野書簡はいいじゃないかと桜会が支持するんです。重宗さんの方や党の執行部は、桜会が言う程度じゃ問題ないという状況でした。

　そこで私が、もしかしたらこれは反佐藤の蟻の一穴になる可能性があるから、これは勝負した方がいいと思って、坂本三十次さんのところへ行って、これこれしかじかと言ったら、坂本さんが、それは面白いから三木に手伝わそうじゃないかと言うので、二人で三木さんのところへ行って説明したら、三木さんは、それはいいとなった。

　三木派の参議院議員で小山邦太郎さんがやりましょうと言って、参議院の三木派十人近くが桜会を応援するという話になった。そうしていると、自民党の執行部の方は簡単じゃないぞという話になって、重宗をおろして木内四郎さんを立てるから河野もおろせということになる。

　そうしたら、桜会の中にはそれでいいんじゃないかと言う人もいたけれど、今度は三木さんが絶対おりるべきじゃないと言って頑張るんです。謙三も、河野書簡というのは重宗がいかぬと言っているんじゃなくて、重宗の息のかかったのが出るというなら参議院改革ができないから同じだと言って頑張ったんです。

　桜会は一時は冷めたけど、最後は謙三は私一人でもやります、桜会には御迷惑かけませんと言ったので、桜会も謙三さん一人でやらせるわけにはいかないといって、またみんな立ち上がって、やろうという話になったんです。

　そうすると、社会党が河野謙三を推すと言い、各党も言いに来る。毎日新聞の三宅久之さんという記者も自分で共産党へ行ったりなんかして、共産党も河野謙三ならやりますという話になる。

　そういう動きが漏れて、執行部は河野謙三は野党と結託しておかしいと言うわけです。すると謙三は、俺は世論と結託はするけれども野党と結託なんかしていないと言い返したりしてね。

　そのときはホテルニュージャパンに立て籠って、せりふを考えたり声明を書いたり、新聞記者まで集まってきて声明文を書いたりしていた。そうしていると、そこへ保利茂幹事長、それから中曽根さんも説得に来ました。謙三は一々会うのが嫌だから帰してくれと言うので、僕は玄関番をやっていたから、もう帰ってくれと言って中曽根さんと大分やり合い、結局憮然とした顔をして帰っていきました。

　いろんな人から、おりろ、おりた方がいいんじゃないかと言われたけど、結局選挙になっちゃうんです。勝つか負けるかわからず、最後まで五、六票足りない。足りないけれども何とかなるんじゃないかという気持ちもあって選挙に突っ込みました。問題は、自民党の中で何人が河野謙三と書くかだったんです。

　議長選挙の本会議は、延会になって議場からみんな出たんです。その時の自民党執行部からの指示は、誰を入れたか確認するために隣同士が投票用紙を見せ合うということになっていた。ところが、何人かが議場から出たときに、ポケットに投票用紙を入れてトイレで書いてくるわけですよ。それで投票に行って河野謙三の票を入れた人がいた。

　だから、結局最後まで誰が書いたかよくわからないんですよね。

○紅谷　議長選挙は無記名ですから、誰が入れたのかわかりませんからね。

○河野　木札は持っていくけど無記名だからわからない。三、四人はわかったけれど、最後の三、四人はわからない。とにかく僅差だったと思う。

○紅谷　当時の記録によると、自民党から十五名が造反して河野謙三さんに入れ、票数としては百二十八票と百十八票で十票差でした。

○河野　謙三が当選した瞬間に、傍聴席で万歳と叫んだのがいました。坂本三十次さんです。隣に自民党の副幹事長が並んでいるのに、傍聴席で一人で万歳をしている。僕は通路一つ隔てていたけど逃げちゃったんです。後で坂本さんが、洋ちゃん、いなくなってひどいよ、万歳と言って周りを見たら俺一人だったと。坂本さんは本当に勝負をかけていて、真剣で一生懸命でした。

○紅谷　石原慎太郎さんも河野謙三さんに投票したようですね。

○河野　彼は初当選直後で、右も左も全然わからないんですよ。だから余り派閥の関係とかはなかった。

　神奈川県出身で湘南高校なんですが、そこで河野鉄雄という河野謙三の長男と同級生なんです。河野鉄雄は謙三の秘書をしていて、どうも石原との連絡があったらしく、石原が途中で桜会の控室に来て、俺は石原慎太郎という者だ、助太刀に来たとか言っていたという話でした。彼が来たので途中ですごく元気になりましたよ。

　選挙結果は本当に僅差でした。一時は桜会も崩れて、もうやめようと言った人が三、四人いたんです。そういう人が最後は抱き起こして戻ったんです。

　参議院選挙の直後だから、選挙違反が随分あったようで、それをネタに執行部がゆすったり、いろいろなことをしたらしいな。

○紅谷　河野書簡は大きく四つの柱があって、一、正副議長の党籍離脱。二、参議院から大臣、政務次官を出さない。三、党議拘束の緩和。四、審議時間の確保です。

　この四つのうち、正副議長の党籍離脱については直ちに実行されました。しかし、参議院から大臣、政務次官を出さないこと、党議拘束の緩和については、なかなかそうはいかなかったようです。

○河野　それは、河野謙三議長が誕生してから各党にそれを正式に申し入れたんですが、各党がいい返事じゃなかった。

　個々の議員はみんな賛成したのに、党の意思としては決められなかったんですね。一年たってから趣旨に賛同したとかという返事が来るんです。

○紅谷　河野書簡については、衆議院でいう議会制度協議会に当たる参議院問題懇談会という協議機関を作って、そこで有識者を入れて議論して、一応合意はされたようです。

○河野　謙三議長の私的諮問機関ができるんです。河野義克さんという参議院の前の事務総長が中心になられて、秋山ちえ子さんとかが入っていたと思いますが、そこから提案もあったんですが、理想ではあるけれども簡単にはいかないということで、ペンディングのままでした。

　そういう経過もあって、謙三は議長になった直後から参議院の院内を歩き回って、傍聴者の通路のエレベーターがどうだとか階段がどうだ、女性用のトイレがないとか、そんなことを幾つか言って直したんです。でも、参議院改革の本質のところは実際はなかなか実現しない。本人は党籍を離脱してみたり、与野党七、三の構えで、野党の意見をより聞こうとかはやったんですが、参議院全体を動かすところまではいかなかったと思いますね。

○紅谷　ただ、党籍離脱、いわゆる会派だけではなく党籍まで離脱されたわけですから、議長の中立性を担保する明確な形を示されたということかと思います。

○河野　それは大変なことだったんです。与党から出す議長候補を必ず複数出して、どっちにするかは野党が決めろなんという話まであったんですよ。与党がこの人と言って、それを野党がうんと言う

のは、野党に全く選択肢がないからだめだ、だから二人出してくれというような話まで野党側からあったかな。

○紅谷　それは、与党が議長を出すからには、野党も受け入れられる人を出してほしいというのは、いまだに残っていると思います。

○河野　議長というのは、でき得べくんば全会一致で決める。全会一致で決めるためには、あらかじめ野党の了解を得られるような候補にするというのは、人格の問題も見えちゃまずいわけだけどあるだろうなあ。

○紅谷　近年政権交代が何度かありましたけれども、その過程で、あれは副議長でしたが、野党が候補を内々出してきたら、与党から異論が出て候補者が変更になったことがありました。

　常任委員長でもそういうことがあり、候補者を議運理事会に事前に披瀝するというルールになっていました。

　それから、参議院の審議時間の確保については、今も三週間は確保するという暗黙のルールは生きていると言っていいと思います。

　ところで、河野先生は謙三議長から、議員になるに当たって影響を受けたというお話でした。河野謙三議長から三十年近くたってから衆議院議長に就かれましたけれども、就任されるに当たって、河野謙三議長からの教訓、参考にされたことがあれば、お聞かせください。

○河野　僕は自分の議員生活を振り返ってみて、前半は謙三に影響されましたね。誰かに教わらないと何にもできなかったから、割と謙三の指導力が強かった。謙三と一郎というのはみんなに比較されて、一郎さんは頑固で剛直で、謙三さんは話のよくわかる柔軟な人だというのが一般的な評価なんだけれども、意外に一郎の方が柔軟で謙三の方が頑固なんだよ。

　さっきの議長選挙の時の謙三を見ると、本当に頑固ですよ。議長になってからも最後の方は相当頑固だった。

　それに比べると、一郎というのは頑固だという割には、例えば軽井沢で河野新党を作ろうというときに、最後は大野伴睦さんや松村謙三さんの説得を入れて断念したりして、意外に人の言うことをよく聞いていたんですよ。

　あの頃は政治家同士の友情というか、君の将来を考えればこうすべきではないかとか、夜中まで二人っきりで話をして、それじゃ、そうするかと決めたりして、結構人の話を聞いていたんです。あの頃がそういう時代だったのかもしれないけれど、一郎という人は一本調子で何でもこうだ、というのでもなかったように思います。

　河野謙三という人は、とてもいろいろなことを経験した人なんです。衆議院は、河野一郎追放後に身がわりみたいな形で出て落選して、次の選挙で当選して、そうしているうちに一郎が追放解除になったから辞めたんです。衆議院から参議院へ回って五期やりましたから両院の経験があって、副議長も議長もやった。いろいろな経験をして、それだけ非常に長い議員歴がありながら、閣僚は一切断って、僕の知っている限りでも二回は閣僚就任の誘いというか打診があったけれども一顧だにせず断っていた。自分は参議院議員である以上は、院の仕事の委員長はやるけれども閣僚はやらない。議員として務めるのだと、そこは非常にはっきりしていた。

　しかも余り出しゃばらない人でした。いつも一歩下がって全体を見ている、とても経験豊かな人でした。だから、余り直接言われることはありませんでしたが、その都度いろいろなことを言ってくれました。

　加えて話術の大変巧みな人で、特に座談は上手な人でした。大演説をぶつという人じゃないけど、演説も決して嫌いじゃなく出ていって、全く自分のペースで小さい声で言う、そういう話をする人でした。

　議長になって、よく言われているのは七、三の構え、つまり野党

の方に七分向いて与党は三分でいい、七、三の構えでやるべきだということをしきりに言っていた。

それからもう一つは、やはり国会というものは有権者あってのものだから有権者を大事にしなきゃいかぬというので、議長になって最初の改革というのは参観のエレベーター設置でした。

そのほかに僕が非常に印象に残っているのは、政治資金規正法案です。採決の結果が可否同数になり、識者に言わせれば、可否同数のときは否と言うべきなのを、可と言って法案を通したんです。それは、あの法案が非常に大事だということを自身は知っていて、何回やっても通らないできた法案を、ここで決着をつけた方がいいというので、可と言ったんでしょうけれども、あれは非常に印象に残りましたね。

○紅谷　政治資金規正法の採決で可否同数になり、議長は可と決裁された。議長決裁で可とされたのは、新国会になってからは初めてでした。ただ、この法案は同時に議題となって可決された公職選挙法と一体だったので可と決裁した、という理由だったかと思います。

河野議長時代にも、イラク特措法でしたが、可否同数になるかもしれないということで、過去の事例を引っ張り出して御説明した記憶があります。

○河野　そうでした。同数になるとどうするかと、みんな心配していたけど、ならなかったよね。郵政民営化の時も、積み上がっている木札を見て、可否同数になったら僕はどうすればいいか議長席で考えたことがありました。

○築山〔衆議院事務局〕　可否同数になったら、どういう判断をされるつもりだったのでしょうか。

○河野　物によるでしょうね。一番可否同数になりそうだと思ったのは臓器移植の法案ですね。あれは、とにかく各党が党議拘束を外したから、何票になるか全くわからなかったんです。結果は大差でしたが、本会議開会前には、もしかしたら同数もあるかもしれないという思いはありましたね。

○紅谷　河野謙三議長は、議長を二期六年でしたが、一期目は野党の力で議長になり、二期目は自民党を含めた支持で議長に再任されました。議長のあり方を示されたという印象が強い方で、そういう意味では、私が、河野議長の側におりまして、そこらあたりは謙三議長の影響があったのかなと感じていました。

○河野　他にモデルはいないわけですからね。あれを見ていて、やはり野党に支えられた議長というのは、困ることは、議運をやっても何をやっても、与党から連絡する人もいなきゃ誰も報告にも来ない。謙三議長には、栗原祐幸さんだけが自民党の議運のメンバーで来てくれていたようです。

○紅谷　最後になりますけれども、どこかの連載で、河野先生は議員としては、父よりも河野謙三さんの方が影響が大きかったかもしれないと言っておられましたが、如何でしたか。

○河野　僕は自分の議員生活を振り返ってみて、前半はやはり謙三に影響されました。父が亡くなっていてよくわからないから、誰かに教わらないと何にもできなかったから、割と謙三の指導力が強かった。だけれども、議員生活の後半は、やはりおやじのことがいろいろ思い出されましたね。

《文教族、文部政務次官》

○紅谷　三回目の衆議院選挙が昭和四十七年十二月に行われて当選され、第二次田中内閣の発足で文部政務次官に就任されました。

今とは自民党内の役職の序列が若干違うのでしょうが、当時は各委員会の理事を経験し政務次官を経て、部会長から委員長、それから大臣という順序だったかと思いますが、文部政務次官というのは、

初当選からの経歴からして適材適所だったかと思いますが、如何でしたか。

○河野　初当選のときから党の文教部会に入って、文教委員会では理事も経験したし、文教には藤波孝生さんや西岡武夫さんとか仲間がいました。僕が文部政務次官になって、西岡さんが文教部会長になるのか、そんなことで比較的慣れていたから意外と不安はなかったですね。

ただ、何人かの先輩から、ここで文部政務次官をやったら本当の文教族になるから、他をやったらどうだという話があったんです。それも一つの考えだと思ったけれど、何になりたいという希望も余りなく、黙っていたら文部政務次官と言われて、ある意味でほっとしたというのが本音だったんです。

○紅谷　その時の文部大臣は、タカ派と言われていた奥野誠亮先生でした。

○河野　それが最大の問題で、本当に頭を抱えましたね。

一期生、二期生で文教族の走り使いをやっていたときに、一番の仕事は日教組対策。当時は、何といったって日本の文教政策をやるときには日教組をどうするかでした。

奥野大臣は、日教組はだめだという側の大将です。奥野さん、森山欽司さん、それから内藤誉三郎さんとかです。文教部会の大御所は灘尾弘吉さんで、非常に温厚な人柄だったけれども、内務省出身だから日教組には相当きつい人でした。

反対に、そうでないのは坂田道太さんとかで、どっちかというと、話し合おうというタイプの人だったから、僕らはそういう人が頼りだったんです。

当時の日教組は積極的にストをやっていたから、子供たちを人質にとってストをやるのはけしからん、自民党側は教師は聖職者だから、ストなんかやっちゃいけないとしきりに言うんです。

そんな対立をしている中で、奥野大臣はすごく剛直で、日教組とは一切会わないし口もきかない。しかし、文部省の現場は、日教組とやりとりしないと事柄は進まないわけです。大臣は絶対だめというから、役所の半分ぐらいは同調する人がいたけれども半分ぐらいは困って頭を抱えていました。

○紅谷　今でこそ教員の組織率は低いですが、当時はほとんどが組合に入っていて、しかも総評の中でも日教組は中心的な組合でしたから、話をしないと進みませんね。

○河野　僕ら若手の文教族にはタカ派もいましたが、日教組と会って話をしていいんじゃないかと思っていた。日教組も何か手がかりをというので、僕らのところへもアプローチもあった。当時は、槙枝という人が日教組の委員長でしたが、槙枝さんなんかから、会ってみないかとかいう話もありました。そんなのを片手で持ちながら奥野さんの下で働くわけだからきつくて、奥野さんは日教組が来るといなくなるという状況でした。

ただ、自民党の文教部会は、その頃は若手が相当強くなっていて、西岡さんや藤波さんが文教部会を仕切りかけていて、灘尾さんたちは上座に座っているけれど、実際何かをやるのは西岡さんになる。西岡さんという人は、日教組と話をしながらも反面では物すごくきつい人でした。

西岡さんに政務次官をやることになったと言ったら、俺ら文教部会で全面的にバックアップするから思い切ってやれという話をしてくれ、奥野大臣と衝突するんじゃないかと半分楽しみにしていたらしいけれども、衝突もせずに十カ月ぐらいの任期でした。

○紅谷　そうすると、奥野大臣は、日教組に関しては河野政務次官にお任せだったのですか。

○河野　任せたというより、大臣は日教組問題を一切やらないわけだから、その問題になると、文部省の役人は政務次官室へ来て頼み

ますという話になるんです。

それで、そのころから仕掛けがあった人材確保法は、教員の給料をばんと上げようという話で、その魂胆は日教組が給料を増やせという要求だから、向こうの要求より高く給料を上げようと。そんなこと言ったって財源をどうするんだ、公務員の給与を全部上げるとなると大変なことになるので、教員の給与だけを上げて、ほかの公務員の給料は上げないのだから大騒ぎになったんです。大騒ぎになりましたが、最後は、田中総理が理解があって、やっていいんじゃないかと言ってくれ、それで、人材確保法を通そうとなったけれど、これが通らない。日教組は給料を上げてくれるからうれしいけど、自民党に上げられるのは困るから断固反対で大騒ぎになりました。

○紅谷　そのころ、槙枝さんというのは日教組の委員長でしたが、総評の議長もやっていたのではないですか。

○河野　そうなんです。だから、割と視野が広く加盟組合全体のことを見ていたから、単体の利益というわけにはいかなかったんです。

義務教育では日教組対策が一番大きな問題で、もう一つは、子供の数が急激に増えて学校が足りなくなる人口急増地区の学校対策。神奈川県なんか五十校だか百校の学校を作らなきゃいけないみたいな大変な騒ぎで、あのころは仮設の教室をあっちこっちに作っていた。義務教育では日教組と学校不足ですね。

そして、もう一方で大学紛争。めちゃくちゃな大学紛争をやっていたわけですが、僕が政務次官のころには収まっていたんです。三回目の選挙のときには影響があるんじゃないかと思っていたけど、むしろ支持されて勝ったんですけど、それまでは文教政策が振り回されたということがあったんです。

政務次官当時のもう一つの案件は、高等専門学校の増設や技術科学大学の創設です。豊橋に技術科学大学を作ったときは、自分で行って決めました。

それから、一県一医大ですね。それは、大学紛争の巣窟は医学部で、医学部だけ五年制なものだから、そこに人が溜まる。そこで、田中総理から、医学部は独立医科大学にして、影響されないようにしたらどうかとかという意見が出る一方で、足りないから各県に一校ずつ医科大学を作れと言われて作ったんです。

実は、文部省ではそんなにスキャンダルというのはなかったんですが、医科大学を作り始めたら、誘致運動や作ろうとした際にすごいスキャンダルが起きたんです。

○紅谷　中選挙区ですから、静岡に作れ、いや浜松だという誘致合戦があったわけですね。

○河野　そう、静岡県が大騒ぎになって、西と東で引っ張り合いになった。ちょうど高見三郎先生が静岡出身で、高見大臣のときに引っ張りっこになって、大臣も裁定できなくてお手上げになった。それで部会が入って、どっちか決めたらどうかとか、いろいろな話がありました。

それから、田中総理から大学を全部地方へ出したらどうだという話があって、あのころ、明治から青学から、みんな郊外へ行ったんですよ。失敗で今はみんな戻っているけれどもね。

○紅谷　学生が都心に集まらないよう地方に分散させようという政策でしたね。

○河野　環境のいいところへ行けとか言ってね。

それから、青年の家というのを各県が作ったから、文教予算は増えたんですよ。概算要求で前年の何割増しとかいうけれども、何に使っていいかわからなくて、やたら青年の家とかを作った。

失敗もあったけれども、一番文教が伸びた頃でした。

《政治工学研究所（政工研）の結成》

○紅谷　自民党には、政策や理念を共有する集団として派閥があって、選挙や人事での後ろ盾となり、また総裁ポストに向けて一体となって活動しています。お父様の河野一郎先生は春秋会という河野派を結成し、また先生ご自身も当選直後は中曽根派に所属されていました。この頃は三角大福中と言われた五派閥がある中で、個々の政策についての集団として政治工学研究所を結成されました。これは先に話がありましたが、佐藤内閣の政治姿勢に対する不信を機に、党改革を主張するメンバーで結成されたとのことですが、そもそも政治工学研究所という少し変わったネーミングですが、結成の経緯をお聞かせください。

○河野　最初は自分の事務所のつもりで作ったんです。講師を呼んで、いろいろな人の話を聞こうと思って作ったんですが、お願いすると結構な講師が来てくれて、一人で聞くのは申し訳ないから一緒に聞かないかというような誘い方で、拓世会の仲間に声をかけて話を聞いたりしていました。政治的な行動をするとか政策的に集まろうとかいうのは最初は余りなかったんですが、だんだん何か政治的にやろうといって集まる場所がないか、それじゃ少し大きい事務所で集まろうかとなった。

　おやじは、東京駅の前にある丸ビルの四階に事務所を持っていて、議員会館を使ったことがないんです。その頃の議員会館は木造の汚いものだけど、国会のすぐ脇にあるから便利なんですね。おやじは、国会議事堂にいて議員会館を行ったり来たりしているだけでは世間の話が聞こえない。何がみんなの一番の関心事かを一番敏感に感じるには、あの中だけにいちゃだめだ、外にいなきゃだめだと言っていました。

　そんなことが耳に残っていたものだから、僕もずっと外の事務所にいて、会館では一遍も仕事をしたことがないんです。会館はいつも秘書が座っていました。

　そんなこともあって、最初はみんなが集まりやすいヒルトン、今のキャピトル東急が便利だから集まったんだけど、お金がかかるから事務所をつくろう、それなら名前もつけなきゃいけないとなった。

　政治工学研究所という名前は、政治にも工学的な見地、つまり、政治はいまだに義理と人情で動いている面があって、それは大事だけれども、一方でやはり工学的な見地から政治を見る視点も大事で、これからの政治はそういう部分を見ていかなきゃいけないと、僕がつけたんです。

　政工研という事務所でやっているうちに、名前を何かつけようといって藤波さんに頼んだら青嵐会になったものだから、それはだめだと言っているうちに、もう政工研でいこうとなりました。

○築山〔衆議院事務局〕　座長は河野議長ではなく藤波さんにお願いされたんですよね。

○河野　そうです。僕の事務所でやって僕が座長だと、何か一人でやっているようになるし、藤波さんという人が座ると様になって、みんな余り文句を言わなかったね。同期では僕は歳が下で、僕より下は山口敏夫さんしかいなかったんですよ。

○紅谷　新自由クラブ結成までの三年近くは、ずっと藤波先生が座長だったのですか。

○河野　そうでした。藤波孝生という人は面白い人で、国会議員で一番尊敬するのは前尾繁三郎さんだと言うんです。どうしてかと聞いたら、前尾さんのように二番目にいて存在感があるのがいい、ナンバーツーの存在感というのがいいと言う。前尾さんは一番になりかけたけれどもクーデターで潰された。藤波さんはそれがいいと言うんです。そこだけは変な人だなと思っていました。

　だから、みんな安心して付き合うんです。この人は余り野心がな

いから、付き合っていても危ない目には遭わない。河野さんだと付き合うとどこへ連れていかれるかわからないけど、藤波さんは安心だということでした。

○紅谷　文教族や拓世会のメンバー、さらに早稲田の関係の人たちが多かったようですが、一時かもしれませんが、小沢一郎さんや橋本龍太郎さんも入っていたようですね。

○河野　ええ、入っていました。小沢さん、橋本さんは慶応です。早稲田では渡部恒三さん。それから拓世会の縁で坂本三十次さんとかも入っていた。でも、それは昼に来てライスカレーを食べて帰るだけだから、いざ不信任案に賛成しようとか何かリスクを負うことになると、すぐ五人とか七人に減っちゃう。平時にライスカレーを食べて人の話を聞こうというときには二十人余りがいたんじゃないですかね。

講師は、すごくいい人が次々に集まったから、おもしろかったですよ。

○紅谷　この頃は、派閥ではない集団には政工研以外に青嵐会もありましたが、他にもあったのでしょうか。

○河野　ちょうど派閥が壊れ始めたころですよ。派閥がみんな代替りしたんです。初代の派閥のリーダーというのは強くておっかなくて、非常に権力があった。佐藤栄作さんとか大野伴睦さんとか河野一郎とか、睨まれたらすくんじゃうようなすごい人が派閥のリーダーだったけれど、それがみんな亡くなったりした。二代目になると、どっちかというと、みんな仲よくしようという親睦的だったから、たがが緩んだというか、隣の派閥と一緒になって飯を食べても何のお咎めもない。初代のころは、そんなことをしたら呼びつけられて怒られたんじゃないかと思いますよね。

それで、この頃に派閥横断的な集まりが随分できて、宮沢喜一さんが、水野清さんや林義郎さん達に声をかけて、宮沢さんをキャップにして平河会をやったのが派閥横断では一番早い方じゃないですかね。あとは、小坂徳三郎さんの新風研です。それから政工研と青嵐会。青嵐会はやはり派閥横断で、すごい猛者が集まって、何しろ集まったときに血判を押すというので、みんなでばかじゃないかと言っていたけれども、血の団結とか言ってやっていました。そういうのはみんな派閥横断でしたね。

だけれども、総裁選挙というと結局全部本家の派閥へ戻るわけですよ。

○紅谷　政工研と青嵐会が非常に存在感があったのかと思いますが、田中内閣が倒れて、その後の三木総裁が選ばれる過程で、政工研から総裁候補を出そうという話があったようですね。

○河野　僕らの仲間は理屈が多かったから、あれはだめ、これもだめで、誰もいないなら自分たちで決めて担ごうじゃないかという話になった。具体的に、藤山愛一郎さん、石田博英さん、宮沢喜一さんの名前を挙げて、三人のところへ行くのだけど、みんなあっさり断られた。

藤山さんは、北京に行っておられなかったけど、僕らががたがたやっていたら、急いで帰るといって北京から帰ってこられたんですが、そのときは時既に遅しでした。

宮沢さんが一番冷たかった。私はもう四十を過ぎて、この年になれば、人間は自分の器量はわかっています、出るわけにはいかないし、私は大平派にいて大平がこの選挙を戦うんですから、お帰りくださいと、全然だめでした。

石田さんは、年寄りは全部下がってもらって新しい人に出てもらうことにしたいとか言ったら、君、僕は幾つだと思っているんだと言って、その年寄りと言っている方に俺は入ると。それで、河野君、君は幾つだと言われて、何歳と答えたら、ちょうどいい、君がやったらいいよと。それが悪かったんです。それをみんな聞いていて、

もう洋ちゃんがやれよみたいな話になった。

○紅谷　皆さんは派閥に入っているのですから、問題はなかったのですか。

○河野　そこはさばさばしていて、今では考えられないほど、すごく自由でした。

結局、総裁選は行われなかったけど、それでも推薦人が二十人要るんだから集めようなんて、塩谷さんとか佐藤文生さんとかが紙を持って歩いて、三人集まったとか四人集まったとか言っていました。結局、椎名裁定で三木さんになって総裁選はなくなりましたから、事なきを得て誰もけが人が出ないで済みましたが、突き進んでいたら何人かけが人が出たでしょうね。

○紅谷　政工研は、その後新自由クラブに繋がっていくと言っていいのでしょうか。

○河野　そうですね。

アメリカと日本の旗振りで、中国の北京政府の国連加盟に反対したけれども大惨敗する一方、福田外務大臣の不信任案も通らない。

結局、中国は国連に加盟し、台湾は追放され国連から出てしまう。これから国連活動をやるといったって、難しくなるし大変じゃないかというので、僕らは、こんなことじゃだめだと言っていたら、青嵐会は台湾を担いで、相変わらず蒋介石の恩義、信義を忘れちゃいかぬとか言って、ずっと論争が始まっている中で、田中内閣、大平外務大臣で日中国交正常化をやるわけです。

ところが、田中さんがスキャンダルで辞めて三木さんになって、三木さんも辞めて福田政権になると、青嵐会から石原慎太郎さん、中川一郎さんが入閣する。それで、ほとんど発言しなくなり、僕らだけになってしまった。僕らは、福田さんと余りよくなかった。

僕らは三木内閣のときに離党しましたが、政工研で離党したのは五人しかいません。藤波さん以下は残って、最後、決別は結構大変だったんだけど、残った連中が、君らの路線を死守するとか言ってくれましたが、すぐぐにゃぐにゃになっちゃいました。

○紅谷　政工研が結成されてから五十年近く経過するのですが、今も河野事務所の郵便受けには政治工学研究所とあり、歴史を感じます。

《自民党新政策綱領案の策定》

○紅谷　河野先生が自民党を離党される大きな要因となった、自民党新政策綱領案の策定についてお伺いしたいと思います。

立党二十年に当たって、松野頼三政調会長から、新たな政策綱領を策定するので、小委員会の座長をやってほしいという話があったということですが、松野先生とはどういう関係からそういう話があったのでしょうか。

○河野　それが本当に不思議なんですよ。僕は、それまで松野という人とは全く話をしたこともなく、よく知らない人だったんです。それが、突然、国会の廊下で会ったら、河野君ちょっと来てくれと呼ばれて、我が党は立党二十年を迎えて来年がその党大会だから、何かやらなきゃいけないと考えたら、政策が問題だから政策綱領の見直しをやりたい。親委員会は各派閥の領袖が並んで動かないから、君ら若手が集まって小委員会でたたき台を作ってほしい。新しい時代だから新しい者が考えを出したらいいんじゃないかと言われたんです。

ちょうどその前に、石田博英さんが、自民党が選挙で余り強くないのは政策がもう古くなっているからで、自民党は政策を変えないとこの先やっていけなくなるという論文を中央公論に書いたんです。僕らはそれにとても感銘を受けていたけれども、松野さんの頭の下敷きに、その石田論文が多少あったと思います。

その石田論文をめぐっては総務会で議論があり、総務会長から、石田君のところで委員会をつくって話し合ったらどうだとなって、石田委員会というのができるんです。その石田委員会に十人ぐらいが指名され、僕はたまたま二年生で指名されて入った。そこに松野さんもいたんです。

僕は、松野さんに、小委員会の座長は三年生ではとても無理ですと言ったら、この党は君のおやじなんかが作った党なんだから、思い切っていろいろなことを言ったらいいんだ。俺が見てやるから心配しないで、仲間を募って小委員会でたたき台を書いてみろと言われた。とにかく、この人はすごく口説き上手な人でした。

口説かれて引き受けたけれど、考えてみたら自民党の政策綱領を作るなんて大変だよね。僕も心配だから、松野さんに言われて石田さんのところに相談に行ったら、石田さんは危ないな、余りむきになって一生懸命やらない方がいいぞ、石田委員会で出した案は全部引き出しに入れられたままだからね、と言われたんです。

宮沢さんにも相談に行き、さらに松野さんのところに行ったら、憲法については書いても書かなくてもいいよ、余り変にいじくり回さぬ方がいいよと言われたんです。でも、書かないわけにいかないのではないかと言ったら、松野さんは、憲法はこのままでいいんじゃないかと思っているけど、どうしてもというならば、この憲法を認めるかどうかを再承認というか、これでいいかどうかを、みんなでマル・バツをつけて、国民が承認したという儀式をやるというのはいいかもわからないけど、いじるといったって、いじりようがないだろうという話でした。

そんなことをやればいいのかなと思ってやることになり、メンバーも松野さんに見てもらい、これでいいんじゃないかとなったんだけど、これが大騒ぎになりました。

○紅谷　小委員会のメンバーの人選に制約はなかったのですか。

○河野　君がピックアップして名簿を持ってこい。そうしたら俺が足したり引いたりはしてやるからということだったけど、ほとんど触らなかったですね。

○紅谷　そのメンバーは、林義郎さん、鳩山威一郎さん、他は仲間内みたいな若い人達で、ハト派的で先生の考え方に近いような方ばかりが集まったという印象ですが、異論は出なかったのですか。

○河野　それでいいと思っていたし、選べと言われればそうなるよね。

松野さんにも了承してもらったのに、初日から大騒ぎになって、びっくりしました。会場へ行ったら一杯で、青嵐会がみんな椅子に座っているので、恐る恐るメンバーの席をあけてくださいと言ったら壁側に移り、その中で開会しますと言うと、渡辺美智雄さんだったか中川一郎さんだったかが、このメンバーを選んだ理由をまず最初に説明しろと言われた。御一任をいただいておりますのでと言ったら、誰が一任したんだと。松野さんと言うわけにもいかないからね。

○紅谷　それは、事前にたたき台の案に護憲や軍縮が入っているということが分かっていたのでしょうか、それとも、メンバーを見て集まったのでしょうか。

○河野　どうも、僕がやるというのが気に入らなかったらしい。つまり、福田先生の不信任案のときに騒いだり、若いくせに生意気だ。小委員会とはいえ座長とは何だと言われ、最後は、おまえなんか自民党にいる資格はないとまで言われて、スタートから大騒ぎでした。

憲法について何か書くのか書かないのかというので、恐る恐るだけれども憲法については書かない、だめともいいとも書かない、それから非核三原則は党是に入れる。非核三原則を入れて憲法を落とすと言っただけで、かっとなって怒られた。

○紅谷　非核三原則は国会決議をしているのに、なぜ怒られるので

しょうか。

○河野　そう、やっています。だって、佐藤さんや三木さんが自民党の総裁が総理大臣として発言して、これを党是にするというのは誰にはばかる必要があるかと思って書いたら、それをこっぴどく怒られて、おまえは正気かとか言われて、正気もくそもないだろうと思ったけれども、その頃の党内には、声高に核武装論という人が結構いたんですよ。当時は、まだ国防部会の中には源田実さんとかがおられたから、再軍備論とか核武装論というのがちらちらあったけれども、それは彼が言うから仕方ないというか、それを政策の真ん中に据えようなんという気は全然なかったんです。

それでも、松野さんが最後に引き取ってくれて、タカ派の代表とハト派の代表を政調会長室に呼んで、議論の最初に松野さんが、河野君はちょっと外へ出ていてくれないかと出されて、参りました。

こっちはどんどん譲歩するだけで、幾ら譲歩してもそれでいいというわけにいかないと言い、もうだめだと思いました。

○紅谷　翌年の党大会では、その政策綱領はどうなったのでしょうか。

○河野　次まで繰越しになるんです。結局、三年後に政策綱領の改正というのをやりました。僕は離党していなかったけれど、そのときに政策綱領改定委員会とかというのがあって、委員長は井出一太郎さんでした。井出さんだったから誰も文句を言わず、やはり人徳というのはどうしようもないと思いましたね。井出さんが報告して全く異議なし。信用があるのとないのじゃ、かくも違うかと思いましたよ。

自民党って人なんですよ。だって、政策綱領の中身なんて誰も読まないで、あの人がやるからいいだろうという話ですよ。

今の憲法改正だって、国民投票に付したら、誰が提案者かによって通ったり通らなかったりすると思います。だから、やったらいい、今だったら絶対通らないから。

○紅谷　自民党の新政策綱領の策定に関わられたのが昭和五十年の秋で、その翌年の六月には自民党離党を表明されるのですが、やはりこの件で相当ダメージを受けられたのが、きっかけになったのでしょうか。

○河野　そうでした。こたえました。これはもう自民党には私のいる場所はないなとそのときに思いました。

文教部会の仕事は、私学振興法がいいところまでいっていたから残念だったけど、一方で、ロッキードの裁判が進んでいたから、もうそれどころじゃなかった。

五十一年の十一月が衆議院の任期満了で選挙だったんです。僕が六月に離党すると言ったら、みんなから止められ、松野さんからは夏にはロッキードの白黒がつくから、それまで我慢して、それでだめなら離党しろ、俺も一緒に出てやるから、それまでは俺に身柄を預けろとさんざん言われました。

松野さんには、ありがたいけれども八月の判決まで我慢したら、任期満了の選挙まで数カ月しかなくて何もできません。新党を作ろうと思ったら、選挙までに新党の周知徹底をして、候補者を集めて、お金を集めなくてはならないから、もうぎりぎりで、これ以上延ばせないんですと言ったんです。

松野さんには、政策綱領のときに、すごく世話になり、僕をかばってくれた恩義があったけれど、これだけはだめですと言いました。

《自民党離党と新自由クラブ結成》

○紅谷　新自由クラブの結成は昭和五十一年六月ですから、もう四十年以上前になりますが、松野政調会長から依頼があった自民党の政策綱領の策定作業の挫折が、いつまでたっても変わらない自民党